

【研究ノート 6】

ニガンタ・ナータプッタ (Nigaṇṭha Nātaputta) 死亡年の推定

森 章司

[1] 本稿ではジャイナ教の開祖とされるニガンタ・ナータプッタ (Nigaṇṭha Nātaputta) の死亡年を考察する。

ニガンタ・ナータプッタの死亡年は、たとえば中村元著『インド思想史 第2版』では「(世紀前372年ころに) 72歳で寂した」としている⁽¹⁾。一方ゴータマ・ブッダは「(前383年ころに) 80歳で入滅した」⁽²⁾としているから、ニガンタ・ナータプッタは釈尊より10年ほど後に没したことになる。また早島鏡正・高崎直道・原実・前田専学著『インド思想史』も「ニガンタ・ナータプッタはブッダより20歳年少(前444ころ生れ)で、仏滅後10年に72歳で亡くなっている」としている⁽³⁾。

客観的な史実を調査するときには、もちろんこれらも参照しなければならないが、われわれの「釈尊伝研究」は原始仏教聖典資料に基づくという大前提を立てている。原始仏教聖典の編集者たちがもっていた釈尊の生涯イメージと釈尊教団形成史イメージを再構築するというのが目的であるからである。

ところでこの原始仏教聖典の伝えるところでは以下に紹介するように、疑う余地もないほど明確にニガンタ・ナータプッタは釈尊よりも先に没したとしている。本「研究ノート」も、原始仏教聖典のいうところにしたがうことは言うまでもなく、したがってここで問題とするのは、原始仏教聖典ではニガンタ・ナータプッタは釈尊よりも前に入滅したとされているが、それは釈尊の何歳の時であったか、ということである。

なおニガンタ・ナータプッタはニガンタ派(離繫派)の修行僧で、ナータ族の子孫という意味である。漢訳聖典ではこのニガンタとナータプッタを音訳・意訳を含めてさまざまに翻訳している。ニガンタの音写語を中心に、原始仏教聖典に見られるすべての訳語を掲げると次のようになる。

尼乾陀、尼乾陀若提子、尼乾陀若提之子、尼乾陀惹提子、尼乾陀闍提子、尼乾陀闍提弗多羅、尼乾子、尼乾若提子、
尼健、尼健子、尼健親子、尼健陀若提子、尼健連陀闍提弗多羅、
尼健子、尼健弗、尼健若提子、尼健陀若提子、尼健那耶子、
尼健子、尼健陀慎若低子、
昵揭爛陀、昵揭爛陀慎若低子

以上のうち、尼乾陀、尼健や尼乾子、尼健子はナータプッタのナータの部分を含まず、したがってニガンタ派の修行者を意味して、ナータプッタ個人を表すものではないが、対応経などから明らかにナータプッタを表しているとわかる場合があり、これを上げたものである。

また以下に紹介する聖典の文章中では、ニガンタ・ナータプッタの漢訳表記は原典にしたがって忠実に記すことを心がけたが、ニガンタ・ナータプッタは六師外道の1人として登場

することも多く、この場合の他の5師の漢訳語については原典の表記に必ずしも忠実ではないことを了解されたい。

- (1) 岩波書店 1956年2月 p.047。この根拠は『インド史Ⅱ』（「中村元選集〔決定版〕」第6巻）pp.610～611によると、ジャイナ教の伝承では、ゴーサーラの死んだ16年後にマハーヴィーラは72歳で死んだという伝承に基づいているようである。さらにスリランカの伝説によると、アジャータシャトル王の第8年にゴータマ・ブッダが入滅し、それは紀元前383年であるから、王の即位は紀元前390年になり、さらにジャイナ教の伝説によると、ゴーサーラの死んだ年よりも少し早くにアジャータシャトルは外祖父でヴァイシャリーのチェーダガ王と戦ったとし、この戦争はアジャータシャトル王の即位後間もなくであろうと考えられるから紀元前388年ころになる。マハーヴィーラはその後16年でなくなっているから、その入滅は紀元前372年ということになる、という計算である。アジャータシャトル王の即位とゴータマ・ブッダの入滅はスリランカの仏教伝承にしたがっているわけであるが、他は仏教聖典の伝承ではなく、ジャイナ教の伝承にしたがっていることになる。
- (2) 同 p.53
- (3) 東京大学出版会 1982年8月 p.32

[2] まずニガンタ・ナータプッタの死亡を伝える原始仏教聖典記事を検討しよう。

[2-1] これには次のようなものがある。

DN.029 *Pāsādika-s.* (vol.III p.117) : 世尊は釈迦族のアンバ林の中のヴェーダンニヤと名づける殿堂に (*Sakkesu Vedhaññā nāma Sakyā pāsāde*) ⁽¹⁾ おられた。そのときニガンタ・ナータプッタがパーヴァー (*Pāvā*) で命終した。彼の死によりニガンタの徒は2派に分裂して論争し、在家の白衣の弟子たち (*Nigaṇṭhassa Nātaputtassa sāvaka gihī odāta-vasanā*) でさえ嫌気がさしていた。そのときチュンダ沙弥 (*Cunda samaṇuddesa*) はパーヴァー (*Pāvā*) で雨安居を過した後、サーマ村 (*Sāmagāma*) にいた阿難のもとにやって来て、「最近ニガンタ・ナータプッタはパーヴァーにて滅し (*Nigaṇṭho Nātaputto Pāvāyaṃ adhunā kālakato*)、2派に分かれて争っている」と伝えた。阿難は「このことは世尊に知らせなければならない (*kathāpābhatam Bhagavantam dassanāya*)」と、彼と共に世尊のもとへ行き、その旨を伝えた。世尊はチュンダに、「それは正しく説かれない、出離に導かない、正等覚者によって説かれたのではない法と律であるからだ」と言われ、師と法と弟子との関係を詳説され、さらに清浄梵行の成就、4種の安樂行（四禪）とその果報、過去と未来に関する諸種の謬見、そしてそれを断ずるための四念処（身、受、心、法）を説かれた。このとき世尊の背後で扇いでいたウパヴァーナ (*Upavāna*) ⁽²⁾ が世尊に「この教えを何と名づけましょうか」と質問した。世尊は「この法門を『清浄 (*Pāsādika*)』と名づけて保持すべきである」と告げられた。

『長阿含』017「清浄経」（大正01 p.072下）：世尊は迦毘羅衛国の緬祇優婆塞の林に1,250人の比丘らと共に居られた。ときに沙弥周那が波婆国 (*Pāvā*) において夏安居を終えて、迦毘羅衛の緬祇の園に居た阿難のもとへやって来て、「波婆城で尼乾子 (ニガンタ・ナータプッタ) が命終して久しからざるに、その弟子らが二分して争っている。かの国の人々はその争いにうんざりしている」と報告した。阿難は

「我らは言ありて、世尊に啓さんと欲す」と彼と一緒に世尊のもとへ行き、その事を世尊に告げた。世尊は周那に「その争いは師の教えが邪見邪法であるために起ったものである」と、師と法と弟子との関係を詳説された。そして比丘らに、「共に和合して争いを起さず、三十七道品（四念処、四神足、四意断、五根、五力、七覚意、八正道）、四禅を修習すべし」と説かれた。また正法である十二部経、衣・食・住・薬に関する規定、四禅の七果功德、五蓋の滅、九事の遠離などを説かれた後、世間の有常・無常あるいは世間の有辺・無辺等々の諸悪見を断ずるために、四念処と八解脱を説かれた。そのとき世尊の後ろで扇を煽いでいた阿難は右肩を露にし、右膝を地につけて、世尊に「この法は何と名づけるのですか」と質問すると、世尊は「この経を『清浄』と名づけて保持すべし」と答えられた。

MN.104 *Sāmagāma-s.* (vol.II p.243) : 世尊は釈迦国のサーマ村 (*Sakkesu Sāmagāma*) に住された。そのときニガンタ・ナータプッタがパーヴァーで命終してほど近かった (*Nigaṇṭho Nātaputto Pavāyaṃ adhunā kālakato hoti*)。そして彼の死によってニガンタの徒は分裂して2派になって (*Nigaṇṭhā dvedhikajātā*) 論争し、在家の白衣弟子たちはそのニガンタの徒に嫌気がさしていた。ときに**チュンダ沙弥** (*Cunda samaṇuddesa*) はパーヴァーで雨安居を過した後、サーマ村の阿難のところにやって来て、ニガンタ・ナータプッタのことを伝えた。阿難は「このことは世尊に知らせなければならぬ」と、彼と共に世尊のもとへ行き、その旨を伝え、世尊滅後のサンガにおける論争を心配した。そこで世尊は六諍根を断ち、四諍事を断ずべきことを述べられた後、サンガに争いが起きたときには七滅諍によって対処し、さらに「六可念法を受持すべきである」と説かれた。阿難は歓喜して信受した。

『中阿含』196「周那経」(大正01 p.752下) : 世尊は跋耆に遊行し舍弥村に住された。そのとき**周那沙弥**が波和 (*Pāvā*) で夏坐を受けていたが、波和で**尼犍親子**が亡くなった。久しからずして彼の弟子らが互いに論争して分裂し、在家の白衣弟子たちからも支持されなくなった。周那は3ヵ月の夏坐を終えると、阿難の居た舍弥村の北方にある尸提林へ行って、このことを伝えた。そこで阿難は「この話を聞いたからには、行って世尊に報告しないわけにはいかない」と、彼と共に世尊のもとを訪れ、そのことを報告して、「世尊の滅後に、比丘らもそのような争いが起るのではないかと心配した。世尊は「争いは益するところなし。多くは道と道跡によるのである」と告げて、六諍本、七止諍、六慰労法を説かれた。阿難および諸々の比丘は歓喜して奉行した。

『息諍因縁経』(大正01 p.904中) : 世尊は舍摩迦子 (*Sāmagāma*) 聚落中において夏安居を過ごされた。その時**沙門尊那**は惹盧迦林中において夏安居を過ごしたが、そのとき**外道尼乾陀惹提子**があり極悪であって命終した。尼乾陀に子があり、沙門と闘争を起したいと考えて、世尊の教えを侮辱した。尊那は夏安居を過すと舍摩迦子聚落中の阿難を訪れ、このことを報告した。阿難は尊那とともに世尊のところに行きこれを報告するとともに、もし仏が不在の時、衆中に外道があつて争いが起つたらと心配した。世尊は闘争の起る根本を説かれ、七種滅諍法と六種和敬法を説かれた。

DN.033 *Saṅgīti-s.* (等誦經 vol. III p.207) : 世尊はマッラ族の諸地域を 500 人の比丘たちと遊行して、パーヴァーというマッラ族の町の鍛冶工の子であるチュンダのアンバ園 (Pāvā nāma Mallānaṃ nagaraṃ Cundassa kammāra-puttassa ambavana) に住された。これを聞いたパーヴァーのマッラ族たちはウッバタカと名づける新築したばかりの集会堂 (Ubbhaṭakaṃ nāma navaṃ santhagāraṃ acira-kāritaṃ) を初めて世尊に受用してもらいたいと願い出た。世尊は承諾され、比丘らと共に衣鉢を持って集会堂に赴かれると、世尊と比丘らは中央の柱に寄りつつ東方に向かって坐り、比丘らは西方の壁に寄りつつ東方に向かって仏を前にして坐り、マッラ族の人々は東方の壁に寄りつつ、西方に向かって仏を前にして坐った。このとき世尊はマッラ族のために説法され、「ヴァーセッタらよ (Vāsetṭhā)、夜は更けた。時よろしければ去るべし」と去らしめた。パーヴァーのマッラ族たちが去って間もなく、世尊は舍利弗に「私は背に痛みがあるから、比丘たちに説法するように」と横になられた。このときはニガンタ・ナータプッタがパーヴァーで亡くなってから間もなくのことで (Nigaṇṭho Nāthaputto Pāvāyaṃ adhunā kālakato hoti)、ニガンタの徒は 2 派に分裂して争っていた。そこで舍利弗は比丘らに、「正しく説かれない法と律においてはこのようになる。しかし仏の正しく説かれた教えは寂靜に至らせる。今そのすべてを結集して紛争をなからしめなければならない (tattha sabbeḥ' eva saṃgāyitabbaṃ na vivaditabbaṃ)」と、一法乃至十法 (合計 230 項目) を説いた。彼が説き終ると世尊は舍利弗の所説を印可された。

『長阿含』009「衆集經」(大正 01 p.049 中) : 世尊は 1,250 人の比丘らと共に末羅を遊行して、波婆城の閼頭の菴婆園に住された。そのときは 15 日の満月の晩にあたっていたので世尊は露地に坐し、比丘らに説法された後、舍利弗に「背中が痛いので、比丘らのために説法するように」と告げられた。そして僧伽梨を 4 つに畳んで師子のように右脇を下にして、足を重ねて横になられた。ときに舍利弗は比丘らに「この波婆城で尼乾子が命終して間もないが、その弟子たちが 2 派に分れて争っている。我らは法と律を集めて争いを防ぎ、梵行を長く確立させるべきである」と告げて、一正法乃至十正法 (合計 129 項目) を説いた。このとき世尊は舍利弗の所説を印可された。

MN.056 *Upāli-s.* (優波離經 vol. I p.371) : 世尊はナーランダーのパーヴァーリカのアンバ園 (Nālandāyaṃ viharati Pāvārikambavane) に住された。そのときニガンタ・ナータプッタはニガンタ派の大衆と共にナーランダーに住していた (Nālandāyaṃ paṭivasati mahatiyā Nigaṇṭhaparisāya saddhim)。時にニガンタ派のディーガタパッシン (Dīghatapassin) がナーランダーで乞食したのち世尊のもとにやって来た。世尊は彼に「ニガンタ・ナータプッタは悪業の成熟、展開をどのように考えているか」と尋ねられた。彼は「三罰 (daṇḍa)、すなわち身罰と口罰と意罰をそれぞれ施設し、身罰が重いと考えている」と答えた。これに対して世尊は「三業のうち、意業が重い」と説かれた。この後、彼はニガンタ・ナータプッタのもとに帰ってこれを告げた。ニガンタ・ナータプッタはタパッシンが正しいと教えた。

これを聞いたウパーリという居士 (Upāli gahapati) は世尊をやっつけてやろう

と世尊のもとに行こうとした。タパッシンはゴータマは幻力を持っていて (māyavi) 外道弟子を化すから止めた方がよいと止めたが、ニガンタ・ナータプッタはそういうことはありえないと勧めた。

やって来たウパーリに世尊はさまざまな例え話によって意業こそ重いということを説かれ、彼は納得して優婆塞となった。このとき世尊は「改宗したといっても、従来通りニガンタ派にも食事を施すように」と忠告され、施論・戒論・生天論と四諦を説かれたので彼は法眼淨を得た。彼は家に帰ると守門者をよんで、「今からニガンタ派の男女には門を閉じ、世尊の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷には門を開けよ」と命じた。

ディーガタパッシンはこのことをニガンタ・ナータプッタに知らせると、ナータプッタはにわかには信じなかったが、ウパーリに会ってそれを確かめると、その場に熱血を口より吐いた (tatth' eva uṇhaṃ lohitaṃ mukhato uggañchi)。

『中阿含』133「優婆離經」(大正 01 p.628 上)：世尊は那難陀に遊行し、波婆離の椶林に住された。そのとき長苦行という尼捷が世尊のもとを訪れ、「我が師の尼捷親子は身罰を施設してもっとも重きとなし、悪業をなさしめない」と言った。世尊は彼の質問に対し「意業が最も重く、悪業をなさしめない」と答えられた。

彼は尼捷親子のもとに帰ってこれを告げた。尼捷親子は長苦行が正しいと教えた。これを聞いた優波離居士は世尊のところに行って議論したいと言ったが、長苦行は「沙門瞿曇は幻化の呪をもっているので却って化して弟子とされてしまう」と反対した。しかし尼捷親子が勧めたので彼は世尊のところに行った。世尊はさまざまな例え話によって意業がもっとも重いと説き、優波離は納得して優婆塞となった。世尊は今まで通りに尼捷も供養するようにと説くと彼はさらに感激し、施論と戒論と生天論の三論、四諦の教えを聞いて世尊の法において無所畏を得た。彼は家に帰ると守門者に「尼捷が来たら門を閉じ、世尊の四衆が来たら入るを許せ」と命じた。

長苦行はこのことを聞いて尼捷親子に知らせた。尼捷親子は初めは信じなかったが、自ら優波離に会って確認するに及んで熱血を吐き、波毖国に行ってこの悪患によって命終した。

- (1) 註釈書 *Sumaṅgala-vilāsinī* (vol.III p.905) によれば、「アンバ林の中の殿堂」について、「『そのアンバ林の中の殿堂に』とは、アンバ林の中で技術(技芸)を学ばせるために、作られた長い重閣があり、そこに住んだ、である (tesaṃ ambavane pāsāde ti tesaṃ ambavane sipp' uggahan' atthāya kato digha-pāsādo atthi, tattha viharati)」としている。

- (2) 「南伝大藏經」の訳者はこれに括弧して阿難のこととしているが間違いである。『長阿含』ではこの役割をするものを「阿難」とするので、これに引きずられたものであろう。

[2-2] 以上がニガンタ・ナータプッタの死亡を伝える記事である。これらの記事の共通して伝えるところをまとめると次のようになる。

まず第1に、ニガンタ・ナータプッタは釈尊の在世中に亡くなったとすることである。その死亡をこのようにたくさんの文献が明確に記しているのであるから、少なくとも原始仏教聖典の編集者たちは、釈尊の生存中にニガンタ・ナータプッタは亡くなったと考えていたこ

とは確実である。

ただ上に紹介した中で、MN.056は「口より熱血を吐いた」とするのみであるから死去したことを意味しないかも知れない。しかしその対応経である『中阿含』133は「熱血を吐き、波毖国に行つてこの悪患によって命終した」としている。しかしこの時には釈尊自身もナーランダーのパーヴァーにおられたとされているから、もしそうなら DN.029 *Pāsādika-s.*や『長阿含』017「清浄経」、MN.104 *Sāmagāma-s.*、『中阿含』196「周那経」などが、釈尊が釈迦国ないしヴァジジ国におられた時に、チュンダ沙弥から知らせを受けて初めてそれを知ったという情報と矛盾する。釈尊も同じ場所にいたなら、注進を受ける前に知りうる環境にあったはずであるからである。したがって「熱血を吐いた」は死亡したを意味するのではないと理解した方がよいであろう。しかし『中阿含』133が「ナーランダーからパーヴァーに行つて、この悪患によって死んだ」というように、熱血を吐いたのと死亡したのとは異なる時点であるとすれば、ナータプッタが熱血を吐いたのは釈尊がナーランダーにおられる時であったが、死んだという報告を受けたのは釈迦国ないしはヴァジジ国におられる時であったと解釈することができる。

また第2には、『息諍因縁経』の惹盧迦林中というのはよく分からないが、ニガンタ・ナータプッタが亡くなった場所を「パーヴァー」と考えていたのも確実であろう。しかしながらこのパーヴァーがどこにあったのかは必ずしも明確ではない。この知らせを釈尊が聞かれた場所も区々であり、またナータプッタの死亡が記される時点も微妙に異なっている。そこでこれらを併せて表にしてみると次のようになる。

経名	世尊の在処	死亡が記される時点	死亡場所
DN.029	釈迦族のアンバ林の中のヴェーダンニャ (Vedhañña) と名づける殿堂	死亡の知らせを受ける	パーヴァー
『長阿含』017	迦毘羅衛国の緬祇優婆塞の林	死亡の知らせを受ける	波婆城
MN.104	釈迦国のサーマ村	死亡の知らせを受ける	パーヴァー
『中阿含』196	跋耆国舍弥村	死亡の知らせを受ける	波和
『息諍因縁経』	舍摩迦子聚落 (サーマガーマ)	死亡の知らせを受ける	惹盧迦林中?
DN.033	パーヴァーというマッラ族の町の鍛冶工の子であるチュンダのアンバ園	死亡してから間もなく	パーヴァー
『長阿含』009	末羅国波婆城の閼頭の菴婆園	死亡してから間もなく	この波婆城
MN.056	ナーランダーのパーヴァーリカのアンバ園	熱血を吐く	ナーランダー
『中阿含』133	那難陀の波婆離の棕林	熱血を吐く	波毖国

まずナータプッタの死亡場所であるパーヴァーであるが、『長阿含』009はそれを「この波婆城」とする。これは釈尊が末羅国波婆城の閼頭の菴婆園におられたということを受けているのであろうから、ここに使われている「此」はマッラ国をさすであろう。いうまでもなくマッラ国のパーヴァーは、釈尊が入滅される直前に鍛冶工のチュンダの供養を受けて下痢されたところである。これに対して MN.056は熱血を吐いたのはナーランダーとし、その対応経の『中阿含』133もナーランダーの波婆離の棕林とし、そののち波毖国に行つて命終し

たとしている。

この他の文献のパーヴァーがどこにあったのかは明示されていないが、しかし現在のジャイナ教では裸形派・白衣派ともに、マハーヴィーラの入滅地をナーランダーの近くの現在のパーヴァープリ (Pawapuri) とし、ここを聖地として巡礼しているから、原始仏教聖典におけるニガンタ・ナータプッタの入滅地もナーランダーの近くのパーヴァーであったと理解するのが正しいであろう。おそらく MN.056 と『中阿含』133 の伝承はこれと軌を一にしているものと考えられる。『長阿含』009 がマッラ国のパーヴァーとし、その対応経の DN.033 もそのような理解をしているように推測されるのは、釈尊の入滅の場面のパーヴァーに引きずられたのであろう。チュンダという人物が登場することなど、あまりにも『涅槃経』とイメージが似ているからである。なお [4] に紹介するように、ナータプッタの活動場所はナーランダーが多いことから、このパーヴァーはナーランダーの近郊のパーヴァーであることは確実であろう。

次に、ナータプッタの死亡の知らせを初めて受けられた時に、釈尊がおられた場所である。この場所の細部については必ずしも一致しないが、DN.029 *Pāsādika-s.*とその対応経『長阿含』017「清浄経」、ならびに MN.104 *Sāmagāma-s.*は釈迦国ないしはカピラヴァットゥとしている。また『息靜因縁経』は舎摩迦子聚落とするが、これは MN.104 の釈迦国のサーマ村 (Sakkesu Sāmagāma) に相当するであろうから、これも釈迦国であったと考えてよからう。とすると『中阿含』196「周那経」が「世尊は跋耆に遊行し舎弥村に住された」とするのは大きく異なる。跋耆はヴァジ国を指すからである。しかしながら村名は「舎弥村」であって、これは MN.104 の「サーマ村」、『息靜因縁経』の舎摩迦子聚落に対応するであろうから、『中阿含』196 のいう「跋耆国」は「釈迦国」の誤伝であると考えられるであろう。このように考えれば、釈尊が初めてニガンタ・ナータプッタの死亡を知られたのは釈迦国におられた時であったことになる。

そして DN.033 *Saṅgīti-s.*や『長阿含』009「衆集経」が、釈尊がマッラ国のパーヴァーのアンバ園におられた時、背痛を訴えられて舍利弗に代りに法を説くように命じられ、舍利弗がニガンタ・ナータプッタの徒の轍を踏まないように、法と律を結集しなければならないと訴えたのは、ナータプッタが死んでから間もなくのことであったとされているから、釈尊が彼の死んだのを知られてから一定の時間を経過した後のことであったということになるであろう。

以上の流れを時間的経過に沿って整理すると次のようになる。おそらくニガンタ・ナータプッタが入滅する少し前に、釈尊はマガダ国のナーランダーに遊行されたのであり、そのときニガンタの徒であったウパーリ居士を教化され、優婆塞とされた。このときにはナータプッタもナーランダーにいたが、これを知った彼はショックを受けて熱血を吐き、それが死に至る原因となった。

そしてこの時からしばらくした雨期中に、ナータプッタはナーランダーの近くのパーヴァーで亡くなった。このときチャンナ沙弥は同じパーヴァーで雨安居していたのでこれを知り、釈尊のライバルであったナータプッタが死んだとなれば一大事であるから、これは知らせねばならないと雨期が明けると早々に、釈迦国において雨安居を過ごされた釈尊に会うために

出発して、まず秘書室長役の阿難に会って報告した。阿難もこれはぜひ釈尊に知らせなければならぬと早速、チュンダともども釈尊と会い、このことを知らせた。

釈尊はその後ほどなくして、マッラ国のパーヴァーに行かれたが、そのとき背痛を患われ、舍利弗に代りに法を説くようにと命じられた。舍利弗はナータプッタが死んでその徒が2派に分かれて紛争していることを話題にして、法と律をまとめる必要性を主張し、釈尊の教えを一法から十法までに整理して説いたのである。

[2-3] 以上の中の記憶しておくべき登場人物は阿難と舍利弗である。まず阿難については、ナータプッタの死亡時には阿難はすでに秘書室長的な地位についていたことは、チュンダ沙弥の知らせを取り次ぐことなどから明らかである。また舍利弗は釈尊よりも先に入滅したとされるが、ここでは舍利弗はまだ存命であるから、ニガンタ・ナータプッタは舍利弗よりも先に死亡したということになる。ただし釈尊が背痛を患われていることを考えると、それは釈尊の晩年のことであつたと想像される。

ところでこのニガンタ・ナータプッタの死亡記事には、もう1人重要な役割で登場する人物がある。それは「チュンダ沙弥」⁽¹⁾である。おそらく同一人物をさすのであろうが、沙弥チュンダはSN.047-013⁽²⁾とその対応経である『雑阿含』638⁽³⁾に舍利弗の侍者として登場し、奇妙なことにここでは舍利弗が般涅槃したことを釈尊に知らせる役割を担っている。ちなみにSN.047-013の仏在処は舎衛城の祇園精舎であるが、『雑阿含』638の仏在処は王舎城の竹林精舎である。

なおこの時もチュンダは最初に阿難に知らせるが、阿難は「このことは世尊に知らせなければならぬ (*kathāpābhatam Bhagavantam dassanāya*)」と考えて、世尊に知らせたとしている。これは先に紹介したDN.029 *Pāsādika-s.*とMN.104 *Sāmagāma-s.*において阿難がナータプッタの死を釈尊に知らせる場面とまったく同じ文章である。舍利弗はマガダ国のナーランダールの近くのナーラカ村の出身とされるから、チュンダ沙弥が舍利弗の侍者であつたとすれば、チュンダ沙弥がナーランダールで雨安居を過ごす可能性は高く、パーヴァーにおいて亡くなったニガンタ・ナータプッタについての情報も得やすい環境にあつたということになる。

このように沙弥チュンダは奇しくもナータプッタと舍利弗ふたりの死を阿難に知らせる役割を担うことになったのであるが、先にも書いたようにナータプッタが死んだ時には舍利弗はまだ生きていたのであるから、ナータプッタの死を知らせた方が先であつたということになる。しかしながらしチュンダ沙弥が舍利弗の侍者であつたとするなら、長い遊行をして使者の役割を担うためには舍利弗の指示がなければならぬはずであるが、その形跡がないのが不思議である。「モノグラフ」第11号⁽⁴⁾に掲載されている岩井昌悟研究分担者の【論文12】「阿難以前の侍者伝承と雨安居地伝承」によれば、DN.-A.、MN.-A.、SN.-A.などでは、チュンダ沙弥は「法將軍(舍利弗)の弟であり、彼を諸比丘は未だ具足戒を得ていない時にチュンダ沙弥と呼んで、長老になってからも同様に呼んでいた」⁽⁵⁾とされているようであるから、名称は沙弥でもすでに長老になっていたとするなら、これもありということになる。

なおもう1人目立たないし、DN.029 *Pāsādika-s.*にしか出てこない「世尊の背後で扇いで

いたウパヴァーナ」も注目してよいかも知れない。ウパヴァーナについては先に紹介した岩井昌悟研究分担者の【論文12】「阿難以前の侍者伝承と雨安居地伝承」⁽⁶⁾において詳しく調査されているが、ここでは *DN.016 Mahāparinibbāna-s.*⁽⁷⁾、『長阿含』002「遊行経」⁽⁸⁾、*Mahāparinirvāṇasūtra*⁽⁹⁾などに登場するウパヴァーナが注目される。なぜならここでもウパヴァーナは扇で世尊を煽いでいるからである⁽¹⁰⁾。おそらくこれも仏涅槃が連想されているのであろう。しかしこのウパヴァーナが阿難以前の侍者であったそのときのウパヴァーナでないことはもちろんである。ただしこの対応経の『長阿含』017「清浄経」では、釈尊の背後で煽いでいたのは阿難になっている。

このようにニガンタ・ナータプッタの死亡を伝える経典には、釈尊自身の涅槃イメージが重なっていることを否定できない。

- (1) アッタカターの伝承では、阿難以前の侍者にチュンダ沙弥の名が上げられるが、原始仏教聖典にチュンダ沙弥が釈尊の侍者として登場しないことは、本文中で紹介した【論文12】「阿難以前の侍者伝承と雨安居地伝承」において調査されているとおりである。ただし *DN.016 Mahāparinibbāna-s.*には、カクッター河において釈尊が休息された時、尊者チュンダ (*āyasmant Cudaka*) に「衣を4つに折って敷くように」と命じられたとされている。これがチュンダ沙弥の後の姿かもしれない。vol. II p.134、『長阿含』002「遊行経」大正01 p.020上。ただし白法祖訳「仏般泥洹経」(大正01 p.168下)、失訳「般泥洹経」(大正01 p.183下)、法顕訳「大般涅槃経」(大正01 p.198下) *Mahāparinirvāṇasūtra* (Teil II p.282)には該当箇所がない。
- (2) vol. V p.161
- (3) 大正02 p.176下
- (4) 2006年10月
- (5) p.131
- (6) pp.140~143
- (7) vol. II p.137
- (8) 大正01 p.021上
- (9) Teil III p.356
- (10) 白法祖訳『仏般泥洹経』(大正01 p.169上)、法顕訳『大般涅槃経』(大正01 p.199上)、『根本有部律雜事』(大正24 p.394中)にも同じ場面で登場するが、扇で煽いではない。

[2-4] 以上のようにニガンタ・ナータプッタの死亡記事を記す経典からは、それが釈尊の晩年であったことをイメージさせる。とは言いながらこれらにはその死亡年を特定すべきほどの情報は含まれていない。ニガンタ・ナータプッタが亡くなった後に、弟子たちが2派に分かれて争ったというのは、この時にもこういうことがあったとも考えられるが、ジャイナ教の歴史においてそれが確実に確認されるのはかなり後のことであって、それがここに反映されているのかも知れない。とするならば、ニガンタ・ナータプッタの死亡記事そのものも疑われてくるのであって、中村博士などがいわれるように、ニガンタ・ナータプッタの死は釈尊よりも後のことであったのかもしれない。

しかしこのナータプッタの死亡記事は、原始仏教聖典においてはたとえばアショーカ王の記事のように予言の形で語られるのではなく、釈尊在世中の歴史的事実であったように語られている。したがって聖典の編集者のイメージは、明らかにニガンタ・ナータプッタが釈尊

よりも先に死亡したということである。本研究がジャイナ教などの他の宗教の文献をも公平に参照して、客観的な歴史的事実を追求するものならば、このままで終らせるべきではないが、本研究は原始仏教聖典の編集者がもっていたであろう釈尊の生涯イメージを再構築することを当面の目標としているのであるから、われわれはニガンタ・ナータプッタは釈尊に先立って亡くなったということを前提として、以下にはその死亡年を調査することとしたい。

[3] それではニガンタ・ナータプッタの生存が確認されるもっとも遅い記事はいつごろのものであろうか。釈尊よりも前に亡くなったとして、釈尊の何歳の時までは生存していたということがわかれば、その死亡年を推定するよすがとなる。

[3-1] 確実に生存が知られる資料には次のようなものがある。これにはすでに王となっている阿闍世が登場する。

DN.002 *Sāmañña-phala-s.* (沙門果経 vol.I p.047) : 世尊は 1,250 人の比丘らと共に、王舎城のジーヴァカ・コマーラバッチャのアンバ園 (Jivakassa Komārabhaccassa Amba-vana) に住された。その日は第 4 の月のコームディーの 15 日満月の夜の布薩日 (uposathe pannarase komudiyā cātumāsiniyā puṇṇāya puṇṇamāya rattiya) であったので、マガダ国王にして韋提希の子の阿闍世 (rājā Māghado Ajātasattu Vedehi-putta) は、「今夜はどのような沙門あるいは婆羅門に近侍して、心喜ぶべきであろうか」と大臣たちに諮った。そこで大臣たちはプーラナ・カッサパ (Pūraṇa Kassapa)、マッカリ・ゴースーラ (Makkhali Gosāla)、アジタ・ケーサカンバラ (Ajita Kesakambala)、パクダ・カッチャーヤナ (Pakudha Kaccāyana)、サンジャヤ・ベラッティプッタ (Saṅjaya Beḷaṭṭhiputta)、ニガンタ・ナータプッタ (Nigaṇṭha Nātaputta) の六師に会いに行くことを勧めた。しかしジーヴァカは王に、「世尊のもとを訪れるように」と勧めた。

世尊に会いに行った王は、アンバ園があまりに静かなので恐れを感じつつ、太子ウダーイバッタ (Udāyi-bhadda kumāra) にもこのような静かさを身につけさせたいものだと考えた。世尊は、王の目に見える沙門の果報にはどのようなものがあるかという質問に、さまざまな例え話と戒、定、慧の三学などを説かれた。王は世尊の教えを聞いて優婆塞となり、過去に王権を獲得するために父王を殺害したことを懺悔した。

『長阿含』027「沙門果経」(大正 01 p.107 上) : 世尊は 1,250 人の比丘たちとともに羅闍祇城の耆旧童子の菴婆園に住されていた。その日は 15 日の満月であったので、阿闍世王は何をなすべきかと大臣たちに諮問した。大臣たちは不蘭迦葉、末伽梨瞿舍利、阿耆多翅舍欽婆羅、婆浮陀伽旃那、散若夷毘羅梨沸、尼乾子らの六師に会いに行くことを勧めた。しかし阿闍世王は寿命童子(ジーヴァカ)の勧めで世尊のもとを訪れた。王は菴婆園があまりに静かなので恐れを感じつつ、太子優婆耶もこのような止観を成就するとよいのだと考えた。世尊は王のこの世における沙門の果報は何かという質問に詳しく答えられた。王は世尊の教えを聞いて、五欲に迷って頻婆沙羅王を殺害したことを懺悔して優婆塞となった。王は、翌日、世尊らを食事に招待し、ふたたび父王の殺害を懺悔し、再三にわたって優婆塞となることを誓った。

『増一阿含』043-007 (大正 02 p.762 上) : 世尊は 1,250 人の比丘らと共に羅闍城の耆婆伽梨園に居られた。**阿難**を除きすべて阿羅漢であった。その日は 15 日の受歳時であったので**阿闍世王**は、何をなすべきかと大臣たちに尋ねた。彼らは**不蘭迦葉**、**阿夷耑**、**瞿耶楼**、**波休迦旃**、**先畢盧持**、**尼毘子**の六師に会いに行くことを勧めたが、阿闍世王は**耆婆伽王子**の勧めで、世尊のもとを訪れた。王は園があまりに静かなので恐れを感じつつ、**優陀耶太子**にもこのような寂然を身につけさせたいと考えた。王は父王を罪なくして殺したことを懺悔し、「現世で福德を積み、現世で果報を得ることができるのか」と尋ねた。世尊は「現世で果報を得ることができる」と答えられた。王はこの教えを聞いて優婆塞となった。さらに世尊は「この世に命終して天に生まれる者に 2 種ある。それは罪の本をつくらず善を修める人と、罪をなしてそれを改める人である」と説かれた。

『僧祇律』「単提 049」 (大正 22 p.369 下) : **阿闍世王**は**耆婆**の勧めで 500 人の夫人らと共に菴婆羅園に赴いた。王は世尊に「沙門果經」に説かれたように現世での沙門の果報について尋ねた (不蘭迦葉、薩遮尼乾子のほかの氏名は上げられていない)。そのとき夫人たちは、説法が長引いたので宝璽を外した。そのとき城中からの太鼓などの音を聞き、王は父王を殺した罪があったので慌てふためいて城に帰った。そのため夫人らは宝璽を置き忘れてしまった。これを聞いた外道婆羅門は「もどらないであろう」と言った。しかし翌朝に探しに行くと、宝璽がそのまま置き忘れたところにあった。比丘らがこのことを世尊に告げると、世尊は「宝を手を取ることを許さず」と制せられた。(単提法第 4 9 「捉宝戒」因縁)

『増一阿含』045-007 (大正 02 p.773 下) : 世尊は羅闍城の迦蘭陀竹園におられた。このとき**尼乾子**らの**六師** (他の名前が挙げられていない) は、「世尊の人气で布施が減った」と思い、嫉妬していた。そこで彼らは**尸利掘**という**王舎城**の**長者**を唆し、世尊を毒殺しようと謀った。これを承諾した長者は、世尊のもとを訪れて食事に招待した。世尊はこれに応じて彼の家へ赴かれたが、世尊が種々に化作するのを見て改心し懺悔した。ときにこの謀を知った**阿闍世王**は激怒し、**耆婆伽王子**と共に長者の家へやって来た。しかし、世尊が無事であることを知って安堵した。世尊は仏弟子となった長者に「これからも外道らに布施するように」と説かれた。

B 文献のジャータカにも次のような資料がある。

Jātaka 150 *Saṅjīva-j.* (vol. I p.508) : この本生話は世尊が竹林精舎におられた時、悪友と交わった**阿闍世王** (Ajātasattassa rañño) について話されたものである。**阿闍世王**は**提婆達多**と親しくしていて、彼のために象頭山に精舎を建立し、父王を弑逆した。しかし提婆達多が大地に飲まれたと聞いて恐れを抱き、生きた心地がしなかった。世尊に会って懺悔したいと願っていたが、おのれの罪のあまりに深いことを羞じて仏に接することができなかった。しかしカッティカ月の夜祭りが行われた時、大臣等にそれぞれがもっとも尊崇する沙門、婆羅門は誰かと問えば、**ジーヴァカ・コーマーラヴァッチャ**は仏の名を上げるに違いないと考えた。それぞれの大臣は**プーラナ・カッサパ**、**マッカリ・ゴースーラ**、**アジタ・ケーサカンバラ**、**カクダ・**

カッチャーヤナ (Kakudha-kaccāyana)、サンジャヤ・ベーラッティプッタ、ナータプッタ・ニガンタ (Nātaputta-nigaṇṭha) を上げたが、ジーヴァカはしばらく黙っていたのち仏の名を上げた。王は世尊に会い、世尊は「沙門果経」を説かれた。王が去った後世尊は、「王には善根がすでに絶えている。もし王が王位を奪うために父王を殺さなかったら即座に法眼を得たであろう。しかし大罪を犯したために預流果を失った」と説かれた。

また次の経も、阿闍世王が王位を奪った後にもニガンタ・ナータプッタが生きていたことを証するものと考えてよいであろう。阿闍世は登場しないけれども、提婆達多が地獄に堕ちることが確定しているとされているから、破僧事件の後をシチュエーションとしているであろうからである。

MN.058 *Abhayarājakumāra-s.* (無畏王子経 vol. I p.392) : 世尊は王舎城の竹林園に住

された。アバヤ王子 (Abhaya rājakumāra) はニガンタ・ナータプッタを訪問した。そのときナータプッタはアバヤ王子に、如来は他人の好まない言葉を語らないというなら、**提婆達多**に対して世尊が「提婆達多は悪趣・地獄に1劫住して救うことができない (āpāyiko nerayiko kappatṭho atekiccho)」と説かれたことは矛盾するではないかと言って議論せよとけしかけた。そこでアバヤ王子は世尊のところに赴き、他の3人とともに (世尊を入れて4人を) 明日の食事に招待した。翌日の朝になって世尊が供養の食事を終えた時、アバヤは「如来は他人の好まない言葉を語らないのか」と質問した。世尊は「一概にそうではない」と答えられた。アバヤが「ニガンタの師からはそのように聞いていない」というと、世尊はその事情を問いただされ、アバヤは事情を説明した。そのとき、幼少にして遅鈍なる童子 (*dahara kumāra manda*)

(1) がアバヤ王子の膝に仰臥していた。世尊はこの子を喩えにして、「如来はその語が真実であって、利に合する時には他人が好まざる言葉でも語る」と説かれた。教えを受けてアバヤ王子は優婆塞になった。

なおこのときアバヤ王子の膝に抱かれている「遅鈍なる王子」が、ジーヴァカの可能性のないことは、【研究ノート2】「ジーヴァカ (Jivaka-Komārabhacca) の諸事績年代の推定」の[3-2]において指摘しておいた。

[3-2] 以上から、原始仏教聖典の編集者たちは、ニガンタ・ナータプッタが阿闍世が父王を殺して王位に上った後まで生存していたと考えていたことがわかる。ただしこれらの経では、ナータプッタは他の5人の六師とともに名前が挙げられているのみで、あたかもその時点で生きてるように描かれてはいても、ただ単に形式的に上げられているにすぎないという可能性は否定できない。例えば[1]の註(1)に書いたように、ジャイナ教の伝承がゴースーラはマハーヴィーラよりも16年も前に死んでいるとすることを信じるなら、少なくともマッカリ・ゴースーラは、この時点ではすでに死去していると考えなければならないであろう。ただし原始仏教聖典にとってはニガンタ・ナータプッタの存在は他の5人とは比べ物にならないほど重要であるから、他の5人はともかくナータプッタだけはその生存を信じてよいのではなかろうか。しかも前項の最後に上げたMN.058もその証左となると考えることができれば、これにはナータプッタは実際の登場人物として現れているから、阿闍世が王となった後に生存していたことは間違いがなかろう。われわれは阿闍世がマガダの国王となっ

たのは釈尊 72 歳＝成道 38 年の雨安居後のことと考えているから (1)、ニガンタ・ナータプッタの死はそれよりも後ということになる。

なおこの經典の阿闍世王は父王を殺したことを真剣に懺悔しており、その子のウダーイバツダの行く末をも心配していることなど、それなりの落ち着きを得ていることなどを勘案すると、この経が説かれたのは、父親殺しをしてからそれなりの期間が経過した後をイメージしていると考えてよいのではなかろうか。これも推測に過ぎないが、この「**沙門果經**」が説かれたのは、**王位を篡奪してから 2 年後、すなわち釈尊 74 歳＝成道 40 年の雨安居の最後の日のこととしておきたい。**雨安居の最後の日とするのは、この経がコームディーの夜のこととされ、コームディー (komudī) とは、カッティカ月の満月の日であり、白蓮華 (Kumuda) がこの頃に花をつけることからこのように呼ばれるのであるが、これは雨期の 4 ヶ月の終りの日とされているからである (2)。MN.058 の説時も同じころと考えて差し支えなからう。

このように考えることが許されるなら、ニガンタ・ナータプッタは釈尊 74 歳＝成道 40 年にはまだ生存していたのであって、亡くなったのはこの後ということになる。

(1) これは [1] の註 (1) で紹介した、中村元博士のニガンタ・ナータプッタの死亡年を推定する資料として使われている阿闍世王の即位年についてのスリランカの伝承も勘案したものである。

(2) 「モノグラフ」第 10 号 (2005 年 4 月) に掲載した、岩井昌悟【資料集 5】「原始仏教聖典における釈尊の雨安居記事」p.083 参照。

[4] 以上の外に、当該経の説かれたその時点でニガンタ・ナータプッタが生存していると知られる資料には次のようなものがある。

[4-1] おそらく本節の主題に直接関係するようなものはないと思われるが、原始仏教聖典におけるニガンタ・ナータプッタ資料として利用できるであろうから紹介しておく。なおそれぞれの経の内容紹介の最後にナータプッタの所在と考えられる場所を〈 〉のなかに記入しておいた。

SN.041-008 (vol.IV p.297) : そのときニガンタ・ナータプッタはニガンタ派の大集団と共にマツチカーサンダ (Macchikāsaṇḍa) に来ていた。これを聞いたチッタ居士 (Citta gahapati) が多数の優婆塞と共に彼のもとを訪れた。ナータプッタはチッタ居士に、「あなたは沙門ゴータマを信じるか。無尋無伺の三昧はあるか。尋伺の滅尽はあるか」と質問した。居士が「世尊を信じるのではない。無尋無伺の三昧があり、尋伺の滅尽がある」と答えると、彼は自分の大集団を見渡して、「この居士は何と正直で諂誑なき者か。凡そ尋伺を滅尽すべしと思えるものは網で風を捕え、手のひらでガンガーの流れを止めるようなものだ」と言った。居士が「慧と信じずれが勝れているか」と尋ねると、ナータプッタは「信よりも慧が勝れている」と答えた。そこで居士は四禪の教えを述べた。すると彼は自分の大集団を見渡して、「この居士は何と不正直で、諂誑の者だ」と言った。そこで居士は「あなたは先に言ったことと後で言ったことが違っている」と非難した。〈マツチカーサンダ (Macchikāsaṇḍa) 〉

『雜阿含』574 (大正 02 p.152 中) : 世尊は多数の上座比丘と共に菴羅聚落の菴羅林に

住された。ときに**尼犍若提子**が500人の眷族と菴羅林にやって来て、**質多長者**を弟子にしようとして、「あなたは沙門瞿曇を信じているのか、無覚無観の三昧を得ているのか」と質問した。長者が「私は信をもつてのゆえに来ていたのではない」と答え、**尼犍若提子**は「あなたは正直者だ」と讃めた。……略……長者は**尼犍若提子**を論破したので、彼は同じような試みを二度としなくなった。〈菴羅聚落の菴羅林〉

『雑阿含』915 (大正 02 p.230 下) : 世尊は**那羅聚落の好衣菴羅園**におられた。そのとき**刀師氏聚落主**が師である**尼犍**のもとを訪れた。尼犍は彼に「世尊のところへ行って、『一切衆生を安慰しようとするのに、なぜ説法したり、しなかったりするのか』と質問し、世尊を困らせるように」と命じた。彼は師の命を受け、世尊のもとにやって来た。世尊は「3種の田」と「3つの水器」という譬喩を説かれた。彼はこの教えを聞いて「世尊の前で虚偽の妄説をなした」と懺悔した。〈那羅聚落〉

『別訳雑阿含』130 (大正 02 p.424 上) : 世尊は**那羅乾陀城の売暈林**におられた。そのとき**閉口姓の聚落主**は**尼乾陀**の弟子であったので、**尼乾陀**の悪智慧を受けて世尊を訪問した。しかし聚落主は世尊から3種田、3種甕の説法を受けて、懺悔して優婆塞となった。〈那羅乾陀城〉

SN.042-008 (vol.IV p.317) : 世尊は**ナーランダーのパーヴァーリカのアンバ林** (Nālandā Pāvārikambavana) に住された。ときにニガンタ・ナータプッタの弟子である**アシバンダカプッタ** (Asibandhakaputta) という聚落主が世尊のもとを訪れた。世尊は彼に「師は弟子たちにどのような教えを説いているか」と尋ねられた。彼は「我が師は『殺生、不与取、邪淫、妄語をなす者は地獄に落ちる。その行いが多ければ多きにしがってそのようになる』と教えている」と答えた。これに対して世尊は「そのような説では、悪邪業に身の覚えのある者は、『地獄に落ちる』という見解に捉われてしまう。しかるに私はこの者に、悪邪業を省みてこれを縁として追悔の念を抱かせ、『以後、悪邪業をなすまい』との自覚を以て戒めさせる」と説かれた。彼はこの教えを聞いて優婆塞となった。〈不明〉

『雑阿含』916 (大正 02 p.231 下) : 世尊は**那羅聚落の好衣菴羅園**におられた。そのとき**尼犍の弟子である刀師氏**という**聚落主**が、世尊のもとにやって来た。世尊は彼に**尼犍**の所説を尋ねられた。彼は「殺生、偷盗、邪淫、妄語をなす者は地獄に墮すと説いている」と答えた。世尊は**尼犍**の悪業説の不徹底さを説かれた。彼はこの教えを聞き法眼淨を得て優婆塞となった。〈不明〉

『別訳雑阿含』131 (大正 02 p.424 下) : 世尊は**那羅健陀城の売暈林**におられた。そのとき**結集論者** (造論姓ともする) **聚落主**は**尼乾陀若提之子**の弟子であったが、今は師のところに行くべきでないと考えて、世尊のもとにやって来た。世尊は**尼乾**はどんな教えを説くのかと質問され、殺生や偷盗、邪淫を行うと地獄に落ちると説いていると答えた。世尊は全部が全部落ちるのではない、殺生・偷盗などが少なければ落ちないと説かれた。聚落主は**尼乾**の教えを捨てて優婆塞となった。〈那羅健陀城?〉

SN.042-009 (vol.IV p.322) : 世尊は多数の比丘らと共に、**コーサラ国を遊行し** (**Kosalesu caramāno**)、**ナーランダーのパーヴァーリカのアンバ林** (Nālandā

Pāvārikambavana) に住された。そのときこの地は飢饉で白骨が満ち満ちていた。たまたまニガンタ・ナータプッタとその弟子たちもこの地に住していた。ときにニガンタの徒のアシバンダカプッタ (Asibandhakaputta) という聚落主がニガンタ・ナータプッタのもとにやって来た。師は彼に「沙門ゴータマのところに行って『憐愍を称讃されるのに、この地が飢饉にもかかわらず、どうして遊行するのか』と質問して困らせるように」と命じた。彼はこの命を受けて世尊のもとを訪れた。世尊は家運を損う8つの因と縁(国王、盗賊、火、水などと無常)を説かれた。彼はこの教えを聞いて優婆塞となった。(ナーランダー)

『雜阿含』914(大正02 p.230中)：世尊は摩竭提国を遊行され、1,250人の比丘、1,000人の優婆塞、500人の乞残食人と共に、那羅聚落の好衣菴羅園に住された。そのとき尼犍の弟子である刀師氏聚落主が師のもとを訪れると、師は彼に「詭弁を弄して沙門瞿曇を困らせるように」と命じた。彼は世尊のもとを訪れて、「沙門瞿曇は家々の福利を増長させたいと願っているにもかかわらず、どうして飢饉のときに乞食をするのか」と非難した。世尊は「家の福利を損うのは、人による8つの因縁(王、賊、火、水、蔵、抵債、怨憎、惡子)と第9の無常である」と説かれた。彼はこの教えを聞いて、「虚説妄語をなした」と懺悔した。(那羅聚落?)

『別訳雜阿含』129(大正02 p.423中)：世尊は摩竭提国を遊行し、1,250人の比丘、1,000人の優婆塞、500人の乞兒らと共に那羅健陀城の売豊園林に住された。そのとき尼乾陀の弟子であった閉口姓の聚落主が、師の惡知恵を受けて世尊のもとを訪ね、「世の中が飢饉であるのに大勢で遊行して、田畑を踏み倒している」と非難した。世尊は「そのようなことはない。8つの因縁があつて居家を破壊するのであつて、第9は無常である」と説かれた。彼はこの教えを聞いて懺悔した。(那羅健陀城?)

『中阿含』018「師子経」(大正01 p.440下)：世尊は鞞舍離に出かけて獼猴水辺にある高楼台觀におられた。そのとき多数の鞞舍離の離車族が堂で集会していて、しばしば世尊やその教え、比丘らを称賛した。その場にいた尼犍の弟子である師子大臣が世尊に会いたくなり、尼犍に許可を求めに行ったが、「沙門瞿曇は不可作を説く。もしあなたがこれに影響されたらよろしくない」と反対された。そこで大臣は尼犍に断らずに世尊のもとを訪れ、世尊に「沙門瞿曇は不可作の法を説くと聞くが真実であるか」と質問した。世尊は「真実である」と答え、8つの根本的な立場(①不可作の法、②可作の法、③断滅の法、④可憎惡の法、⑤法律の法、⑥苦行の法、⑦不入胎の法、⑧安穩の法)を明らかにされた。このとき大臣は三宝に皈依して優婆塞となった。(鞞舍離)

AN.008-002-012 (vol.IV p.179)：世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住された。そのときリッチャヴィ族の人々が仏・法・僧を讃嘆するので、シーハ將軍 (Siha senāpati) はニガンタの弟子であつたが、世尊に会いたい旨をニガンタ・ナータプッタに申し入れた。しかしナータプッタはあなたは作業論者 (kiriya-vāda) であるのに、どうして非作業論者 (akiriya-vāda) の沙門ゴータマに会いたいのかと許さなかつた。そこで3度目には師の許可を得ないで、ついにヴェーサーリーを出て (Vesālīyā

niyyāsi)、世尊の居られる僧園に車で赴いた。シーハ將軍は世尊の教えを聞き優婆塞となった。また將軍は彼の家での請食を世尊に請い、許されて翌日比丘衆と共に食事を供養した。〈ヴェーサーリー〉

『パーリ律』「棄捨度」(Vinaya vol.I p.233)：リッチャヴィ族の人々がヴェーサーリーの断事堂に集まって仏・法・僧を讃嘆するので、ニガンタの弟子である**シーハ將軍**は仏に会いたくなった。そこでシーハは**ニガンタ・ナータプッタ**のところに行き、沙門ゴータマに会いたいと申し入れたが、ナータプッタはあなたは作業論者であるのに、どうして非作業論者の沙門ゴータマに会いたいのかと許さなかった。ついに3度目には師の許しを得ないでシーハは世尊に会った。世尊の説法を聞いてシーハは優婆塞となったが、世尊はシーハにニガンタにも布施せよと教えられた。〈ヴェーサーリー〉

『四分律』「棄捨度」(大正22 p.871中)：世尊は**毘舍離**におられた。そのとき**私呵將軍**は500人の梨奢(リッチャヴィ)が集まる断事堂に一緒にいた。その人々が世尊を讃嘆するので会いたくなった。そこで師の**尼犍**のところへ許しを得に行くと、尼犍は「あなたには作法があるのに、瞿曇には作法はない。行くのを止めなさい」と許さなかった。3度まで引き止められたので、ついに許しのないまま世尊に会った。説法を聞いて私呵將軍は三帰五戒を唱え仏教に帰依した。〈毘舍離〉

『五分律』「食法」(大正22 p.149中)：世尊は**毘舍離**に遊行され、**獼猴江**邊重閣講堂に住された。そのとき尼犍の弟子である**師子將軍**は世間の評判を聞いて、世尊のもとにやって来た。世尊に請食を願い供養すると、**尼犍**が嫉妬心を起こして悪評をたたいた⁽¹⁾。〈毘舍離?〉

『増一阿含』033-002(大正02 p.683上)：世尊は**舍衛国祇樹給孤独園**に住された。それは世尊が成仏して未だ久しからざるときであつたが、舍衛城の**月光長者**に子供が生まれて**尼犍子**に見せたところ、薄福の子であるから殺せという。そこで世尊を訪ねた。〈舍衛国〉

『増一阿含』047-003(大正02 p.781上)：世尊は**舍衛国**の**祇樹給孤独園**におられた。そのとき**波斯匿王**が世尊のもとを訪れ、「世尊は『私に施せば福を獲ること多いが、他の者では少ない。我が弟子に施して他の者には施すなかれ』と言っているというが、これは教えに反するのではないか」と疑問を投げ掛けた。世尊は「そのように教えを説いたことはない。常に『鉢の中に残ったものを水に投げ捨てれば小虫がこれを食べ福を獲る。ましてや人に施して福を獲ないようなことがあろうか』と教え、また『持戒の人に施せば、その福は犯戒の者よりも勝れている』と教えている」と答えられた。さらに王は「**尼犍子**が来て『沙門瞿曇は幻術を知り、世間の人を廻転する』と言っていたが、本当であるか」と尋ねた。世尊は「その通りである。廻転幻法とは『殺生と不与取と姪洩と邪見の者は罪を獲ること無量であり、不殺と不盗と不淫と正見の者は福を受けること無量である』という教えである」と説かれた。このとき王はこの教えに賛意を示し、仏教徒以外の外道が国界に入ることを禁じようとしたが、世尊はこれを拒まれて、「畜生の類に施しても福を獲る。外道の人に施せば一億の福を獲、須陀洹と斯陀含と阿那含と阿羅漢と辟支仏及び仏に施せば、その福は量ることができない

であろう」と説かれた。〈不明〉

- (1) 以上の話は *Jātaka* 246 *Telovāda-j.* (vol. II p.262) にも説かれている。「シーハ將軍が世尊に帰依した翌日世尊を招いて食物に肉を添えて出した。ニガンタの徒とニガンタ・ナータプッタはこれを聞いて、世尊が自分に供養するものと決めて調理された肉をそれと知りながら食べた」と非難した」とする。

[4-2] 原始仏教聖典において、生存するニガンタ・ナータプッタに言及される資料は以上のとおりである。このなかにはチッタ居士⁽¹⁾、アシバンダカプッタ聚落主（刀師氏聚落主、閉口姓の聚落主）⁽²⁾、シーハ將軍（師子將軍、私呵將軍）⁽³⁾などが登場するが、ニガンタ・ナータプッタの死亡年を推測する材料となるような情報が含まれるものはない。

なおナータプッタの所在については、『雑阿含』915と『雑阿含』914は那羅聚落とし、『別訳雑阿含』130は那羅乾陀城、『別訳雑阿含』131と『別訳雑阿含』129は那羅健陀城とし、SN.042-009はナーランダーとする。おそらくこれらはマガダ国のナーランダーをさすであろう。しかしSN.042-009は「世尊はコーサラ国を遊行してナーランダーのパーヴェーリカのアンバ林に住された」として、このナーランダーはコーサラ国にあって、マガダ国のナーランダーではないようにも見えるが、この対応経の『雑阿含』914は「一時仏は摩竭提国にあって人間を遊行し、城より城に至り、聚落より聚落に至って、人間を遊行して那羅聚落好衣菴羅園中に至る」とし、DN.016 *Mahāparinibbāna-s.* (vol. II p.081) ではナーランダーのパーヴェーリカのアンバ林は王舎城からパータリガーマの間にあって明らかにマガダ国にあるから、この「コーサラ国を遊行して」は誤りか、あるいはコーサラ国からマガダ国のナーランダーに遊行したことを意味するのであろう⁽⁴⁾。SN.042-008と『雑阿含』916は不明であるが、これらは『別訳雑阿含』131の対応経であるからナーランダーと考えてよいかもしれない。

その他はSN.041-008はマッチカーサンダ (*Macchikāsaṇḍa*) とし、その対応経である『雑阿含』574は菴羅聚落とする。マッチカーサンダは *Dhammapada-A.* ⁽⁵⁾ では舎衛城から30由旬にあるとされており、上記のチッタ居士の住処であるが、詳しいことは判らない⁽⁶⁾。また『中阿含』018とAN.008-002-012、『パーリ律』「菴健度」、『四分律』「菴健度」は内容的に対応し、『五分律』「食法」とともにナータプッタの所在をヴェーサーリーとし、『増一阿含』033-002は舎衛国とする。

- (1) 上記の外にチッタ居士が登場する資料には下記のようなものがある。SN.041-001 (vol. IV p.281)、『雑阿含』572 (大正 02 p.151 下)、SN.041-002 (vol. IV p.283)、『雑阿含』569 (大正 02 p.150 下)、SN.041-003 (vol. IV p.285)、『雑阿含』570 (大正 02 p.151 上)、SN.041-004 (vol. IV p.288)、『雑阿含』571 (大正 02 p.151 中)、SN.041-005 (vol. IV p.291)、『雑阿含』566 (大正 02 p.149 上)、SN.041-006 (vol. IV p.293)、『雑阿含』568 (大正 02 p.150 上)、SN.041-007 (vol. IV p.295)、『雑阿含』567 (大正 02 p.149 下)、SN.041-009 (vol. IV p.300)、『雑阿含』573 (大正 02 p.152 上)、SN.041-010 (vol. IV p.302)、『雑阿含』575 (大正 02 p.153 上)、『僧祇律』「雑誦跋渠法」 (大正 22 p.455 下) である。

なおこのうち SN. と漢訳の『雑阿含』については顕著な特徴がある。まず SN. と漢訳の『雑阿含』がよく対応するのに対して『別訳雑阿含』にはこれがないことであり、また SN.

には釈尊が登場しないが、『雑阿含』には釈尊が登場し、その在処を菴羅聚落の菴羅林とされていることである。SN.におけるチッタ居士の在処はマッチカーサンダのアンバータカ園である。Malalasekera p.415 によれば、マッチカーサンダはカーシの町とされている。SN.041-010 (vol.IV p.302、『雑阿含』575 (大正 02 p.153 上) では居士が命終している。

なお SN.017-023 (vol. II p.235)、AN.002-012-001~011 (vol. I p.088)、AN.004-018-176 (vol. II p.164)、『増一阿含』009-001 (大正 02 p.562 上)、Apadāna 003-049-486 (p.429) はチッタ居士が優婆塞の範となる人とされている。

また AN.001-014-001~007 (vol. I p.023)、『増一阿含』006-001 (大正 02 p.559 下)、AN.006-012-120 (vol.III p.451) は多くの仏弟子たちの徳性が称えられる中にチッタ居士も含まれている。『増一阿含』028-001 (大正 02 p.646 下) は名前が挙がるのみである。

- (2) 上記の外にアシバンダカプッタが登場する資料には下記のものがある。SN.042-006 (vol. IV p.311)、SN.042-007 (vol.IV p.314) である。
- (3) シーハ將軍が登場する資料には次のようなものがある。AN.005-004-034 (vol.III p.038)、『増一阿含』052-006 (大正 02 p.826 上)、AN.007-006-054 (vol.IV p.079)、『増一阿含』048-005 (大正 02 p.791 下)、『根本有部律』「波羅底提舍尼 003」 (大正 23 p.900 上)、『僧祇律』「衆学 050」 (大正 22 p.408 中)、『十誦律』「医藥法」 (大正 23 p.190 中)、『根本有部律』「(比丘尼) 波羅底提舍尼 011」 (大正 23 p.1016 下)、『僧祇律』「雜誦跋渠法」 (大正 22 p.466 上) である。なお最後の『僧祇律』「雜誦跋渠法」には王としての阿闍世が登場する。また『増一阿含』006-004 (大正 02 p.560 上) は多くの仏弟子たちの1人として讃められているのみである。
- (4) ちなみに *Chatttha Saṅgāyana* 版 (vol. II p.507) でも「コーサラ国を遊行して」となっている。なおナーランダーのパーヴァーリカのアンバ林を仏在処とする経には以下があるが、いずれもその国名は記されていない。おそらくマガダ国のナーランダーであることは自明であるからであろう。DN.011 *Kevaṭṭa-s.* (vol. I p.211)、『長阿含』024「堅固経」 (大正 01 p.101 中)、DN.028 *Sampasādaniya-s.* (vol.III p.099)、『長阿含』018「自歆喜经」 (大正 01 p.076 中)、MN.056 *Upāli-s.* (vol. I p.371)、『中阿含』133「優婆離经」 (大正 01 p.628 上)、SN.035-126 (vol.IV p.110)、SN.042-006 (vol.IV p.311)、SN.042-007 (vol.IV p.314)、『雑阿含』915 (大正 02 p.230 下)、SN.047-012 (vol.V p.159)、『雑阿含』498 (大正 02 p.130 下)、『中阿含』017「伽弥尼经」 (大正 01 p.439 下)、『中阿含』203「瞞利多经」 (大正 01 p.773 上)、『雑阿含』978 (大正 02 p.253 上)
- (5) vol. II pp.74~76
- (6) Malalasekera (p.415) はカーシの町で Migapathaka 村のそばにあったとする。

[5] 以上の外にもニガンタ・ナータプッタについて言及されるものがある。かつてニガンタ・ナータプッタのところに行ったことがあるとか、ニガンタ・ナータプッタがこう言ったとかというものである。したがってこの時点でナータプッタが生存していたのか、生存していなかったのかは判断できない。よって本節の主題からすればまったく関係がないが、これもニガンタ・ナータプッタ資料として紹介しておく。

MN.079 *Cūlasakuludāyi-s.* (善生優陀夷小经 vol. II p.029) : 世尊は迦蘭陀竹園からモーラニヴァーパ遊行者園 (*Moranivāpa paribbājakārāma*) に赴かれた。そのとき遊行

者サクルダーイン (Sakuludāyin paribbājaka) が仲間と共に大声を挙げて王論、賊論、大臣論などを論議していたが、世尊の姿を見ると沈黙させ、世尊に法を説くようにと促した。世尊はサクルダーインに先に説くように言うと、彼は「昔 (purimāni) 自ら一切智者 (sabbaññū) であり、一切見者 (sabbadassāvin) であることを自任していた人があり、それはニガンタ・ナータプッタであった」と語った。世尊は彼に縁起、四禅、憶宿命智、有情生死智、天眼、漏尽智、四諦、心解脱、解脱知見を説かれた。そのとき彼は、世尊の教えを聞いて出家しようとするが、彼の弟子らによって妨げられた。

SN.002-003-010 (vol. I p.065) : 世尊は王舎城の竹林園におられた。そのとき種々の外道の弟子であったアサマ天子 (Asama devaputta) らが世尊のところに現れて、プーラナ・カッサパやマッカリ・ゴースーラ、ニガンタ・ナータプッタらの説いたことを世尊に語った。

『別訳雑阿含』307 (大正 02 p.477 下) : 世尊は王舎城・迦蘭陀竹林園におられた。そのとき外道六師 (具体的な名前は上げられていない) の徒党であった六人の天子、すなわち難勝、自在、顕現、決勝、時起、軽弄は初め仏を非難した (このうち決勝は、尼乾若提子は常に「長夜に苦行を修し、妄語を断除すれば、羅漢を離れること遠からず、世尊の数に墮す」と言っていた、としている) が、やがて、「王舎城の山の中で毘富羅を最上となし、大地の諸山中で雪山を最上となし、天人中で如来を最尊となす」と誦した。

AN.003-008-074 (vol. I p.220) : あるとき阿難はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住していた。そのときリッチャヴィ族のアバヤ (Abhaya) とパンディタクマーラカ (Paṇḍitakumāraka) が阿難のもとにやって来て、「ニガンタ・ナータプッタは『苦行によって古き業を滅し、新しき業を作らない。かくして一切の苦を滅する』と説くが、世尊はどのように説くのか」と質問した。阿難は「世尊は涅槃を作証するために持戒、四禅、無漏の心解脱・慧解脱の教えを説かれる」と答えた。するとパンディタクマーラカがアバヤに「君はどうして阿難の善説を随喜しないのか」と告げると、アバヤは「私が随喜しないはずがない。随喜しない者は頭が裂けるだろう」と語った。

『増一阿含』052-007 (大正 02 p.826 下) : 世尊は舎衛国の祇樹給孤独園におられた。そのとき波斯匿王は世尊のもとを訪れて、「どのような処に施せば功德を得ることが出来るか」と質問した。世尊は「貪欲蓋と瞋恚蓋と睡眠蓋と調戲蓋と疑蓋を捨て、六根を護り、繫念して前に在り、身魔と欲魔と死魔と天魔を降伏した人に施せば、福を得るであろう」と答えられた。さらに王は「身行と意行と口行のうち、どれが最も重いか」と質問すると、世尊は「意行が最も重い」と答えられ、「心は法の本となり、心は尊く、心に使われる、中心に善を念じ、即ち行い即ちなさば、その善報を受くること、影の形に随うが如し」という偈を唱えられた。王は「かつて尼犍子を訪ねたとき、『沙門瞿曇は我に施せば福を得ると説く』と語ったが、いま世尊は自らを称讃せず、他を誹謗されない」と告げた。そこで世尊は「ただ『持戒の人に施せばその福は量り難いが、犯戒の人にはない』と説くのみである」と応えられた。

[6] 六師外道の1人としてニガンタ・ナータプッタがあげられる資料がある。いずれも形式的な表現であってリアリティーには乏しいが、しかし「釈尊は若くて出家してから久しくない」とされている。これを文字通りに受け取れば、ナータプッタを含む六人は生存していたことになるであろう。またこの定型句からすれば、六師外道はニガンタ・ナータプッタを含めていずれも釈尊より先輩であったことになる。このような資料を紹介しておく。

SN.003-001-001 (vol. I p.068) : 世尊は舎衛城祇樹給孤独園に住されていた。そのとき**波斯匿王**が世尊のもとを訪れた。世尊は王の問いに、「私は無上正等覺をさとった」と語られた。すると王は、「**六師外道**（**プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴースーラ、・ニガンタ・ナータプッタ、サンジャヤ・ベーラッティプッタ、カクダ・カッチャーヤナ、アジタ・ケーサカンバラ**）ですら『無上正等覺をさとった』と宣言しない。まして尊者**ゴータマ**はまだ年若く、出家して日が浅い（daharo c'eva jātiyā navo ca pabbajāya）ではないか」と告げた。そこで世尊は、「王よ、若いからといって軽んじてはいけない。クシャトリヤ族と蛇と火と比丘を軽んじてはいけない」と誠められ、「賢者は己が利を見て、蛇と火と名声あるクシャトリヤ族と具戒の比丘に対して正しく行なえ」という偈を誦された。王はこの教えを聞いて、世尊に皈依して優婆塞となった。

『雜阿含』1226 (大正02 p.334下) : 世尊は拘薩羅の人間を遊行して、舎衛国祇樹給孤独園に至られた。これを聞いた**波斯匿王**は世尊のもとを訪れた。王は「世尊は自ら『無上正等覺を成じた』と述べているようだが」と疑念を呈した。そこで世尊は「真実である」と応じられると、王は「なお信じ難い。**富蘭那迦葉、末伽梨俱徐梨子、刪闍耶毘羅邸子、阿闍多迦舍欽婆羅、迦羅拘陀迦旃延、尼乾陀若提子**といった先輩格にあたる者たちでさえ、『無上正等覺を得た』とは言わない。まして年若く、出家して間もない世尊が、どうして正覺を得られるだろうか」と語った。世尊は「利利の王子、龍の子、小火、年若き比丘の4つは、いずれも軽んじてはならない」と教誡され、「利利の形相具らば貴族の名称を發す、復た年幼稚なりと雖も智者は軽んぜざる所なり、此れ必ず王位に居す、顧念せば怨念を生ず、是の故に軽んずべきこと難し、応に大恭敬を生ずべし」という偈を誦された。

『別訳雜阿含』053 (大正02 p.391下) : 世尊は俱薩羅国から舎衛城・祇樹給孤独園に遊行された。その時**波斯匿王**は世尊が舎衛城に來られたと聞いて訪ねて行って、世尊は出家すれば必ず悟りを開けると教えたか、まことにそれは世尊の言葉かと質問した。その通りだと答えると、王は「まだ私は信じられない。**富蘭那迦葉、末伽梨俱徐梨子、刪闍耶毘羅邸子、阿闍多迦舍欽婆羅、迦羅多迦旃延、尼乾陀闍提弗多羅**などは出家して久しいのに悟れない。しかるに世尊は年少で出家して未だ久しくないので悟ったとは」といった。世尊は「世に4事（王子、龍子、火、比丘）あって、小なるといへども軽んじてはならない」と諭され、王は懺悔した。

『根本有部律』「破僧事」(大正24 p.142下) : **勝軍王**（波斯匿王）は言った。「喬答摩の説かれるところでは、我は実に阿耨多羅三藐三菩提を得たとされる。しかし私は

信じない。なぜなら耆老の外道すなわち**瞋刺拏、末羯利、珊逝移、脚拘陀、昵揭爛陀等の六師**でさえ阿耨多羅三藐三菩提を得たとは言っていない。しかるに**鸯耆摩沙門は小年にして最近出家したばかり**である。どうして阿耨多羅三藐三菩提を得ることができようか」と。仏は大王に「四種の小なるものがある。小刹帝利、小毒蛇、小火、年小出家である。此等は輕欺してはならない。なぜなら小出家も阿羅漢となって大威徳を得ることがあるからである」と説かれた。そのとき憍薩羅主勝軍王はこれを聞いて歡喜して去った。

『雜阿含』978 (大正 02 p.253 上) : 世尊は**那羅聚落の好衣菴羅園**におられた。そのとき那爛陀聚落に商主で外道を信奉する出家者がいて年齢は120歳であった。ときにこの老人の一族で、亡くなって天上に生まれた者が、世尊のもとに行かせようと彼の前に現れ、「悪知識とはどういう人で、また善知識とはどういう人であるのか」等々の質問を偈で投げ掛けた。そして「この質問に答えられる者のところで修行するように」と言った。そこで老人は**富蘭那迦葉、末迦利瞿舍梨子、散若夷毘羅梨沸、阿夷多翅舍欽婆羅、婆浮陀迦旃那、尼乾陀若提子**のもとを次々と訪れては質問したが、答えを得られず失望した。そして「家に戻ろうか、それとも**年少の出家者である世尊**のもとへ行こうか」と迷ったあげく、世尊のもとを訪れた。世尊は「悪知識は言動が一致せず、善知識は一致している。善知識が安心できることは、あたかも子どもが父親の懷ろで横たわるようなものである」等々と説かれた。この教えを聞いた老人は世尊のもとで出家して具足戒を受け、後に阿羅漢となった。

『別訳雜阿含』212 (大正 02 p.452 下) : 世尊は**那羅健陀・置疊聚落・菴婆羅林**におられた。そこに一人の梵志がいて、**那利婆力**(ウダーナのところでは**那羅婆力迦**と綴っている)といい、120歳であり、村人から阿羅漢と尊敬されていた。その親友が死んで天上に生まれたが、この老人をぜひ世尊のところに教えを受けにやらせたいと考えて、下ってきて「怨家とは何か」と質問した。答えられなかったので、**富蘭那迦葉、刪闍耶毘羅胝子、尼健陀若提子**などの六師(他は上げられていない)の所に質問に行ったがわからなかった。これに比べて**世尊は年少で出家してまだ日が浅い**から分らないだろうかと思いつつ行って教えを受け、出家して阿羅漢になった。

Suttanipāta 003-006 (p.091) : 世尊は**王舎城の竹林園**におられた。そのとき**サビヤ**という遊行者(Sabhiya paribbājaka)が**六師外道**(**プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴーサーラ、アジタ・ケーサカンバラ、パクダ・カッチャーヤナ、サンジャヤ・ベーラッティプッタ、ニガンタ・ナータプッタ**)のもとを訪ね、質問してまわったが、満足する答えを得られなかった。そこで彼は、**生年も若く、出家したのが六師よりも目の浅い世尊**のもとにやって来た。彼は世尊の教えを聞いて出家を決意した。具足戒を得るには4ヵ月間の別住を必要としたが、世尊のもとで即座に出家して比丘となり、久しからずして阿羅漢となった。

『四分律』「受戒捷度」(大正 22 p.791 上) : **ガンガー河に住んでいる伊羅鉢羅龍王**がある句を解説してくれたら褒美を与えるといった。そこで**那羅陀**と名付ける梵志が請け合い、**不蘭迦葉、末伽梨𑖦奢離、阿夷頭翅舍欽婆羅、牟提修婆休迦旃延**、

訕若毘羅吒子、尼犍子に尋ねたがわからなかった。沙門婆羅門は歳をとって出家歴も長いが、世尊はまだ若く、出家してまだ日が浅いけれどもわかるかもしれないと尋ねて解決した。そこで龍王と8万4千の衆は法眼淨を得、三帰依を唱えて優婆塞となった。那羅陀も善来比丘戒で受戒し、阿羅漢となって、阿羅漢は112人となった。

『五分律』「受戒法」(大正22 p.106上) : ガンガー河に住んでいる伊羅鉢羅龍王が、ある句を解説してくれたら褒美を与えるといった。そこで占相師阿夷が生まれ変わった那羅摩訶と名付ける梵志が請け合い、プーラナ・カッサパ等の六師(他の名前は省略されている)に尋ねたがわからなかった。六師は歳をとって出家歴も長いが、世尊はまだ若く、出家してまだ日が浅いけれどもわかるかもしれないと尋ねて解決した。そこで龍王は弥勒仏の時に龍身を脱して苦際を尽すという予言を頼りに法眼淨を得て三帰依を唱え、五戒を受けて優婆塞となった。那羅も善来比丘戒で受戒し、阿羅漢となって阿羅漢は62人となった。

[7] このときに六師外道の1人としてニガンタ・ナータプッタも生存していたと考えられる資料がある。これも形式的な記述で、直接の考察材料とはなりえないが、六師外道資料として紹介しておく。

『増一阿含』038-010(大正02 p.727下) : そのとき世尊は獼猴池の側に居られた。この国の人々は世尊や比丘らに衣食などを供養し、八関斎を行っていた。このとき毘舍離城内には六師(富蘭那迦葉、阿夷多翅舍欽婆羅、末迦利瞿舍梨子、婆浮陀迦旃那、散若夷毘羅梨沸、尼犍子)が一堂に会して世尊を非難していた。これを聞いた数那比丘尼が、「我が師は等倫なく、最尊にして過ぐる者なし」などと反論して、彼らを黙らせた。これを見た毘舍離城の人々が「六師は論破された」と言って彼女を称えたので、彼らは再び城内に入らなかった。これを知った多くの比丘らが世尊に事の次第を告げると、世尊は「数那比丘尼は我が声聞第一の比丘尼にして、よく外道を降伏する」と讃められた。

『根本有部律』「僧伽伐尸沙008」(大正23 p.691中) : 波婆⁽¹⁾国の太子であった陀驪摩羅子は、この国にいた六師外道(瞿刺拏迦提波子、末塞羯利瞿梨子、珊逝移毘刺知子、阿市多難舍甘跋羅子、脚具陀迦多演那子、昵揭爛陀慎若低子)を訪ね、教えを聞くが満足できなかった。それを知った世尊は阿説示をこの地へ遣わされた。彼は王舎城から波婆へ至り水蛭林に住した。太子は乞食する彼を見て、出家し阿羅漢を得た。彼は雨安居を阿説示らと過ごした後、許しを得て王舎城の世尊のもとを訪れた。慈比丘と地比丘が彼を無根波羅夷で誹謗しようとしていた。そのとき彼らの妹で、王園にいた慈比丘尼が兄のもとに来たので、彼女に「陀驪摩羅子は我と共に不浄行をなして波羅夷を犯ぜり」と告発するように唆した。これを知った世尊は陀驪摩羅子の本生譚を説かれ、「惡瞋不滿にて無根の波羅夷を以て誹謗すれば僧残」と、僧残法第8「無根謗学処」を制せられた。

『パーリ律』「小事毘度」(Vinaya vol.II p.110) : 王舎城の長者が大きな栴檀の木を得た。長者はこれで木鉢を作らせ、竹竿の天辺に括り付けて、「神通力で取った者に施

す」と言った。プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴースーラ、アジタ・ケーサカンバリン (Ajita Kesakambalin)、パクダ・カッチャヤナ、サンジャヤ・ベラッティプッタ、ニガンタ・ナータプッタらがやって来て試みた。そのとき托鉢にやって来たピンドーラ・バーラドヴァーージャも目連のためにと試み、その木鉢を取った。人々は「鉢を取った」と大声を出しながら彼の後に随った。この声を聞いた世尊は阿難に騒ぎの理由を尋ねられた。阿難はピンドーラが神通力をもちいて鉢を取ったことを告げると、世尊は彼を呼び寄せて呵責され、比丘らに「在家人に神通力を示してはならない」、「木鉢を持つてはならない」と制せられた。

『四分律』「雜犍度」(大正 22 p.946 中)：世尊は王舎城におられた。そのとき外道六師の不蘭迦葉には弟子 9 万人、末伽梨訶奢羅には弟子 8 万人、このように減じて尼犍子には弟子 4 万人があった。時に長者があり末伽梨訶奢離、阿夷頭翅舍欽婆羅、波瞿迦旃延、訶毘羅吒子、尼犍陀若提子の弟子であった。栴檀で鉢を作り、高いところに掲げて神通力ある者は取れといったが、彼らは取れなかった。

そのとき賓頭盧は目連と相談して鉢を取った。世尊は在家人の前で神通力を使うなど叱られ、犯せば突吉羅と定められた。

『十誦律』「雜法」(大正 23 p.268 下)：世尊は王舎城におられた。そのとき樹提居士が栴檀で鉢を作り、高いところに掲げて神通力ある者は取れといった。そのとき外道六師の富樓那迦葉、摩伽梨俱除子、珊闍耶毘羅茶子、尼犍陀若提子、迦求陀迦旃延、阿耆陀翅舍欽婆羅がいたが取れなかった。そのとき目連が賓頭盧頗羅墮は師子吼第一であるのであるからこれを取れというので、賓頭盧頗羅墮が鉢を取った。世尊は在家人の前で神通力を使うなど叱られ、賓頭盧を生涯擯斥した。そこで賓頭盧は瞿耶尼(西牛貨洲)に行き仏法を広めた。

『鼻奈耶』(大正 24 p.877 中)：世尊は王舎城の竹園迦蘭陀所に住されていた。長者樹提が牛頭栴檀を手に入れ鉢を作ってはるか高いところに置いて、取れる者はこれを取れと言った。富蘭迦葉、摩訶離瞿耶樓、阿夷湍、波休迦旃、先毘盧持、尼犍弗らがこれを試みたが取れなかった。賓頭盧は目連連のところに行って、「あなたは世尊が声聞中で神足第一と褒められたのだからあなたが取れ」といった。目連連は木鉢のために神足は現さないと答えたので、賓頭盧が神通力を現してこれを取った。世尊は「賓頭盧よ、私は今汝を擯する。終身般泥洹を得てはならない、閻浮提に住してはならない」と叱られた。

『四分律』「雜犍度」(大正 22 p.952 上)：世尊はヴェーサーリーにおられた。そのとき梨奢(リッチャヴィ)が摩尼鉢を得て、世尊に布施しようとしたが受けられなかった。そこで、不蘭迦葉、末伽羅瞿舍羅、阿夷頭翅舍欽婆羅、波休迦旃延、訶若毘羅吒子、尼犍那耶子や薩遮尼犍子に与えたらどうかと助言するものがあり、薩遮尼犍子に与えようとした。しかし彼は先に沙門ゴータマに与えようとしたと嫉妬し、もし梨奢子が舌を切ってこの鉢の中に満たしたら受けてやるといったので、梨奢子たちは彼を殺した。

(1) この波婆はおそらくナーランダ近郊のパーヴァー (Pāvā) であろう。

[8] ついでにニガンタ資料として、ニガンタ派の人物が登場するものやニガンタ派についての記述を紹介しておく。

MN.014 *Cūladukkhakkhandha-s.* (苦蘊小經 vol. I p.091) : 世尊は釈迦国のカピラヴァットの尼拘律樹園に住された。ときに釈迦族のマハーナーマが世尊のもとを訪れ、世尊に「『食欲・瞋恚・愚癡は心の垢穢である』と説法されているのをよく知っていますが、そうした心が占拠する場合があります」と告げた。世尊は「そうした心が捨てられるならば在家には居ないであろう。私がかつて未だ正覺を成ぜざる菩薩であったとき、『欲は味少なく、苦多く、悩み多きものであって、そこには過患がより多い』と、如実に正しい智慧でよく見て、より勝れたものに到達した」と告げ、五種欲分、欲の過患について説かれた。さらに「かつて私が王舎城の靈鷲山に居たとき、ニガンタの徒たちが仙人山側黒石室 (Isigiripassa-Kālasilā) で苦行していた。そこで彼らと論議したが、そのとき『樂より樂に至らず、必ず苦より樂に至る』と論じた」と述べ、ピンピサーラ王の樂を引き合いに出して教えを説かれた。

『中阿含』100「苦陰經」(大正 01 p.586 中) : 世尊は釈迦国を遊行して迦毘羅衛の尼拘律樹園に居られた。そのとき釈迦族の摩呵男が世尊のもとを訪れて、世尊に「どのように三穢(染心穢、恚心穢、癡心穢)を滅すればよいか」と尋ねた。世尊は「五欲の味は所患が多い。例えば在家者が生業により生活の糧を得ようとしても得られなければ憂い悩み苦しむ。また親子、兄弟姉妹、親族の間でも争いが生じたり、さらに王と王との争い、梵志と梵志との争い、あるいは国と国との争い等々で悲惨な状況に陥るのも欲が本となって生じている。かくして我は欲には樂なく、無量の苦患があると知って、欲のために覆われず、悪のために纏われず、捨樂および無上息を得たのである。かつて王舎城に遊行し、毘婆羅山 (Vebhāra) の七葉樹林石室に居たとき、宴坐より起って仙人山側黒石室に行くと、多数の尼犍の徒たちが種々に苦行していた。理由を尋ねると『尼犍親子の教えは、もし宿命に不善業があれば、この苦行によって必ずや滅すると説くので、彼を信じて苦行をしている』と答えた。そこで頻婆娑羅王を引き合いに出して、欲には樂がなく、無量の苦患があることを示したのである」と説かれた。

MN.035 *Cūḷa saccaka-s.* (薩遮迦經 vol. I p.227) : 世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住された。そのときニガンタ派出身のサッチャカがヴェーサーリーに居住し、論議を挑む者であり、論議に巧みな者ということで、多くの人々に尊敬されていた。その彼がヴェーサーリーの大衆に向って、「自分の論に勝つものはいない」と豪語していたときアッサジが乞食にやって来た。彼はアッサジを見つめるや近づいて「沙門ゴータマはどのように弟子を教導するのか」と問いかけた。アッサジが「世尊は『五蘊は無常であり、無我である。諸行無常であり、諸法無我である』と教導される」と答えると、彼は不快の念をあらわにして、「沙門ゴータマを邪見より離脱させる」と息巻いた。

そのとき 500 人のリッチャヴィ族たちがある用事で集会堂 (santhāgāra) に集まっ

ていたの、彼はそこへ行きリッチャヴィ族たちを引き連れて、大林の重閣講堂にやって来た。このとき多くの比丘たちが露地で経行していて、彼はその比丘らに世尊の所在を尋ねた。比丘らが「世尊は大林の一樹下で昼住のために坐されている」と答えると、彼は500人のリッチャヴィ族たちと共に大林へ入り、世尊のもとを訪れた。最初、彼は意気込んで世尊に論を挑んだが、世尊に詰問されるや黙り込んでしまった。このとき**ヴァジラパーニ夜叉**が彼の頭上に現れて諫めると、彼は怖れを感じて世尊の問いに答え始めた。かくして世尊が彼に五蘊の教えについて論議を尽されると、遂に彼は答えられずに沈黙してうなだれてしまった。これを見たリッチャヴィ族の**ドゥンムカ**が「はさみを切られた蟹のように、サッチャカは再び世尊と論争できない」と貶めると、彼はドゥンムカに「待て、私はお前と話しているのではない」と制し、世尊に「あなたの弟子はどのように師の教えを実践しているのか」と質問した。世尊は彼に五蘊無我についての教えを説かれた。この教えを聞いたサッチャカは自分の軽率さを認め、世尊と比丘たちを翌日の食事に招待した。翌日、世尊は比丘たちと共にニガンタ派のサッチャカの園 (*Saccakassa Nigaṇṭhaputtassa ārāma*) に赴かれ、食事の供養を受け終わると、サッチャカは低き座を携えて世尊の傍らに坐し、世尊に「この布施に功德があるならば、施与者の幸福のためにあれかし」と言った。すると世尊は「あなたのように貪欲・瞋恚・愚癡を断じていない被供養者に由って生ずるものは、それは施与者のためになるであろう。私のように貪欲・瞋恚・愚癡を断じている応供者に由って生ずるものは、それはあなたのためになるだろう」と告げられた。

MN.036 *Mahāsaccaka-s.* (薩遮迦大經 vol. I p.237) : 世尊は**ヴェーサーリー**の大林重閣講堂に住された。そのとき世尊が早朝にヴェーサーリーでの乞食へ赴こうとされていたとき、**ニガンタ派のサッチャカ**が世尊のもとにやって来た。これを見た**阿難**が世尊に、「彼は論議を挑む者であり、論議に巧みな者ということで、多くの人々に尊敬されている。しかも彼は仏・法・僧を誹謗しようとする者であるから、しばらく世尊は着座されるように」と言った。ときに彼が世尊の傍らに座ると、世尊に身修習と心修習について質問した。そこで世尊が彼に「身修習とはどのようなものと聞いているか」と尋ねられると、彼は「例えば、**ナンダ・ヴァッチャ** (*Nanda Vaccha*)、**キサ・サンキッチャ** (*Kisa Saṅkicca*)、**マッカリ・ゴーサーラ** (*Makkhali Gosāla*) のように云々」と、彼らが実践する身修習を述べた。さらに世尊が心修習について尋ねられると、彼は説明できなかった。そこで世尊は「如法の身修習さえ知らないのに、どうして心修習を説明できようか」と告げ、身不修習と心不修習、身修習と心修習について解説された。そして「私がかつて未だ正覚を成ずる前の菩薩であったとき、無上なる寂靜の道を求めて出家し、**アーラーラ・カーラーマ** (*Ālāra Kālāma*) のもとを訪れて無所有処定を、次に**ウッダカ・ラーマプッタ** (*Uddaka Rāmaputta*) のもとで非想非非想処定を得たが、これに満足できずに立ち去った。かくしてマガダ国の中で転々と遊行し、**ウルヴェラー** (*Uruvelā*) のセーナーニガマ (*Senānigama*) に至った。この地で鑽木で火を起す3つの喩えが現れたり、無息禅や断食などの苦行を行じたが、最勝智見を得られなかった。そこで他に菩提に至る道はないかと求めてい

たとき、かつて父の釈迦族の行事中に、畔のジャンプ樹の蔭で体験した初禪を思い出し、これこそ菩提に至る道であると確信した。かくして体力を回復するために粗食を摂ると、私に仕えてくれていた**五比丘**が『沙門ゴータマは贅沢に陥った』と嫌悪して立ち去った。しかしながら自分の体力が回復したところで、四禪を成就し、初夜に憶宿命智、中夜に有情生死智、後夜に漏尽智を得たのである」と語られた。さらに世尊は彼に苦を招く漏を捨てられない癡者とそれを捨てた非癡者について説かれると、彼は驚嘆の声を上げ、「かつて六師外道（プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴースーラ、アジタ・ケーサカンバラ、パクダ・カッチャーヤナ、サンジャヤ・ペーラッティプッタ、**ニガンタ・ナータプッタ**）は私と対論したときには忿怒や不満を現したが、ゴータマは私と対論しても皮膚の色も清まり、顔色も爽やかで、あたかも如来のようである」と言い残し、座を立てて去った。

MN.101 *Devadaha-s.* (天臂品経 vol. II p.214) : 世尊は釈迦国のデーヴァダハと名づける釈迦族の町 (Sakkesu Devadaham Sakkānam nigamo) に住された。ときに世尊は比丘たちに「かつて**ニガンタの徒**のところに赴いて、彼らの主張する『苦行によってすべての苦は滅する』という説には矛盾があることを、劇毒を塗った矢の喩えを以て指摘した。しかも彼らの説に従うならば、精進・精勤の効果が無いことになる」と論じた。然らば、どのようにすれば精進・精勤の効果があるかと言えば、苦因の諸行に念を向け、捨を修習すれば、苦の滅に至るのである」と、女人に恋した男の喩えや箭匠の喩えを以て説かれた後、「完全清浄なる梵行の教えを聞き、信を得て出家修行者となり、戒を具足して六根を防護し、五蓋を捨てて四禪を修し、宿命智と有情生死智と漏尽智を得る行道こそ、その精進・精勤は効果がある」と説示された。

『中阿含』019「尼乾経」（大正 01 p.442 中）：世尊は釈迦族を遊行して天邑 (Devadaha) に住された。このとき世尊は比丘らに「諸々の**尼乾**の教えでは苦行によって前世の業を滅し、新業を作らなければ、苦を滅尽できると説くが、それは虚妄の方便である。如来の教えは行欲を断じて、苦を尽すところにある」などと、尼乾の徒のもとで対論したときのことを語られた後、五蓋（貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑）を断じ、四禪を修して、解脱へと至る行道を説かれた。

『中阿含』012「毘婆沙経」（大正 01 p.434 上）：世尊は釈迦国の迦毘羅衛に出かけて**拘律樹園**に住された。そのとき**目連**は比丘らと共に食後、講堂に集まっていた。ときに釈迦族の**毘婆沙**という**尼乾の弟子**が目連のもとにやって来て、2人で論議を交した。これを天耳を以て聞かれた世尊は晡時に宴坐より起ち、講堂に赴かれ、毘婆沙に「もし比丘が不善の身・口・意を行じ、無明行の漏・煩熱・憂惑あれば、これらを滅して更に新業を造らず、古業を棄捨する。かくして正心解脱した比丘は六善住処を得る」と説かれた。彼はこの教えを聞いて優婆塞となった。

SN.003-002-001 (vol. I p.077) : 世尊は舎衛城の東園鹿子母講堂におられた。そのとき世尊は夕方に独坐より出定して、門外の小屋に坐された。ときに**波斯匿王**が世尊のもとにやって来て、世尊の傍らに坐した。そこへ各々7人の結髮行者 (Jāṭilā)、**ニガンタの徒** (Nigaṇṭhā)、裸形の行者 (Acelakā)、一衣の行者 (Ekasāṭakā)、

遊行者 (Paribbājakā) が通り過ぎた。すると王が席を立て彼らを合掌して再びもとに戻り、世尊に「彼らは阿羅漢であろうか」と尋ねた。世尊は「在家者にはそれを知ることは難しい。彼らの戒や清浄さや確実さや智慧を知るには、共に住んだり、共に語ったりなどして知り得る」と答えられたのち、「容貌にて人は知り難い。外面を見ただけで、信用してはならない。ある人々は内に不浄を懐き、外面を美しく装う」という偈を誦された。

『雑阿含』1148 (大正 02 p.305 下) : 世尊は舎衛国の祇樹給孤独園におられた。そのとき**波斯匿王**は、祇樹給孤独園の門外に**尼乾子**と螺髻梵志と一衣外道の各7人がいたので、阿羅漢と間違えて合掌した。そこで世尊は王に、「彼らは阿羅漢ではない。形相を見てすぐに判断すべきではない」と教誡され、「内に鄙雑の心を懐き、外に聖の威儀を現し、諸の国土を遊行して世人を欺誑す」という偈を誦された。

『別訳雑阿含』071 (大正 02 p.399 上) : 世尊は舎衛国の祇樹給孤独園におられた。そのとき**波斯匿王**が世尊のもとを訪れた。ときに祇樹給孤独園の中に螺髻梵志が7人、裸形の**尼乾の弟子**が7人、一衣外道が7人いて、それぞれ立派な身体をしていた。そこで王は彼らを恭敬した。世尊は「姿や形で阿羅漢であるかどうかを判断してはならない」と教誡された。

『増一阿含』040-009 (大正 02 p.742 中) : 世尊は舎衛国の祇樹給孤独園におられた。そのとき**波斯匿王**は舎衛城を出て世尊のもとを訪れる途上、それぞれ7人の**尼健子**、裸形の人、黒梵志、裸形の婆羅門に出会った。そのとき世尊は多数の人々に説法されていたが、王は「途上で出会った人たちは苦行をなし、利養を貪らないので、阿羅漢とは彼らのことである」と述べた。世尊は阿私陀天師と7人の婆羅門の因縁譚を以て、「裸形を以て阿羅漢とは言わない。凡夫の人が真人を知ろうとするならばそれは無理なことである。真人は凡夫の習慣的な行いを分別できる。凡夫の人が凡夫の行いを知ることにはできないが、真人は凡夫の行いを知る」と説かれた。王は「世尊が説かれる所は甚だ結構だが、世間の人々が分かる所ではない」と、その場を立ち去った。

Udāna 006-002 (p.064) : 世尊は舎衛城の東園鹿子母講堂におられた。そのとき世尊は夕方に独坐より起って、門外の小屋に坐された。そのとき**波斯匿王**が世尊のもとにやって来て傍らに坐した。そこへ各々7人の結髪行者、**ニガンタの徒**、裸形の行者、一衣の行者、遊行者が通り過ぎた。すると王が席を立て、彼らを合掌して再びもとに戻り、世尊に「彼らは阿羅漢であろうか」と尋ねた。世尊は「在家者には、それを知ることは難しい。彼らの戒や清浄さや確実さや智慧を知るには、共に住んだり、共に語ったりなどして知り得る」と答えたのち、「他に依存して生きるな。法によって生きよ」というウダーナを誦された。

『雑阿含』1224 (大正 02 p.334 上) : 世尊は王舎城の耆闍崛山中におられた。そのとき王舎城の多数の人々が遮羅迦外道や**尼乾子外道**らに供養していた。そこで帝釈天は大婆羅門に化作して、世尊に供養するようにと人々を靈鷲山に居られた世尊のもとへ導いて行った。このとき世尊は「サンガに供養すれば大果がある」という偈を誦された。これを聞いた人々は世尊を食事招待した。

『別訳雑阿含』052 (大正 02 p.390 中) : 世尊は王舎城の伽蘭陀竹林におられた。そのとき王舎城内に遮勒、婆羅婆蹉、乾陀⁽¹⁾、三水など 96 種の外道がいて、人々はそれぞれに供養していた。そこで帝釈天は老婆羅門に化作し、人々を導いて靈鷲山におられる世尊のもとを訪れた。世尊は「サンガに布施する功德は大である」と説かれ、これを聞いた人々は世尊を食事に招待した。世尊は城内に入られ、婆羅門や長者らから食事の供養を受けられて、王舎城の人々のために教えを説かれた。

AN.003-007-070 (vol. I p.205) : 世尊は舎衛城の東園鹿子母講堂に住されていた。そのときヴィサーカー・ミガーラマターが布薩の日に世尊のもとを訪れた。世尊は「布薩に 3 つある。すなわち①牧牛者の布薩は日々の牛の飼育にあれこれと心を砕くように、布薩の時も同様に食欲心で過す、②ニガンタ (Nigaṇṭha) の布薩は『杖を棄てよ』と非暴力を教え、布薩の当日には衣服を脱ぎ去るという行為で無所有を勧めるが、いずれも大果はない。③聖者の布薩は如来と法とサンガと戒と天を随念することによって心を浄化することであり、八斎戒 (①殺生を断ち、②不与取を断ち、③非梵行を断ち、④妄語を断ち、⑤飲酒を断ち、⑥非時食を離れ、⑦舞踊・歌謡・音楽・観劇と華鬘・薫香・塗香を離れ、⑧高床・大床を断つこと) を行じて、死後に天に生れる」と説かれた。

AN.004-020-195 (vol. II p.196) : 世尊は釈迦国のカピラヴァットウのニグローダ園に住されていた。そのとき釈迦族のヴァッパというニガンタの弟子 (Vappa Sakka Nigaṇṭhasāvaka) が目連のもとにやって来た。夕方、2 人が講堂 (upaṭṭhānasālā) で議論しているところへ世尊が訪れて、目連に「何を議論しているのか」と尋ねられた。彼が議論の内容について答えると、世尊はヴァッパに「身・語・意や無明の縁により生ずる諸漏はこれらを離れるときには存在しない。そして新しい業は作らず、古き業は触れて滅ぼす。このように心解脱の比丘は六内処 (眼、耳、鼻、舌、身、意) によって六外処 (色、声、香、味、触、法) を喜ばず、憂えず、捨に住して正念正知する。かくして一切の受は清涼となるだろうと了知する」と説かれた。彼は世尊の教えを聞いて優婆塞となった。

AN.005 Upasamṇapadā-vagga (vol. III p.271) : さまざまな外道の名が上げられている。すなわち邪命外道 (ājīvaka)、離繫 (nigaṇṭha)、剪鬚髮弟子 (muṇḍasāvaka)、螺髻 (jaṭilaka)、遊行者 (paribbājaka)、マーガンディカ (māgaṇḍika)、執三杖 (tedaṇḍika)、アヴィルツダカ (aviruddhaka)、ゴータマカ (gotamaka)、デーヴァダンミカ (devadhammika) である。

『増一阿含』041-001 (大正 02 p.744 上) : 世尊の苦行時代のこととして、そのとき多くの尼犍子が修行していたと回想される。そのとき尼犍子らは手を上げ、日を指し、身体を曝して学道し、あるいは蹲って学道していた。その理由を尋ねたところ、「昔不善行をなした。今苦しむのはその故であるから、それを滅しようとするのである。行が尽きれば苦も尽き、苦が尽きれば行もまた尽き、涅槃に至る」と答えた。

Therīgāthā vs.109~110 (p.134) : もとニガンタであったバッターニ (Bhaddā purāṇanigaṇṭhi) の詩。私は靈鷲山で世尊に出会い受戒した。またアング国、マガダ

国、ヴァッジ国、カーシ国、コーサラ国を十有五年の間遍歴して国民の信施を受けた (raṭṭhapiṇḍam abhuñji) ⁽²⁾。

Apadāna 003-055-544 (p.502) : アバヤ (Abhaya) のアパダーナ。私はいま山谷最上城 (Giribbaja-puruttama 王舎城) においてビンビサーラ王の子にして名づけてアバヤという (22 偈)。悪反に従いニガンタに従わされ、ナータプッタに遣わされて世尊のもとに行き教えを聞いて出家した。そして久しからずして阿羅漢位を得た (23 ~ 24 偈)。

『四分律』「単提 033」 (大正 22 p.658 中) : そのとき瓶沙王の姉の子に迦羅というものがあつた。その迦羅が尼犍子のもとで出家をしたいと願っていた。そこで王は「先に沙門釈子に供養して、それから出家せよ」と命じた。このとき世尊は比丘らに、「沙門の施食時には別衆食を許可する」と制戒された。

『五分律』「雑法」 (大正 22 p.171 中) : 時に比丘たちは多くの飲食を得て病気になった。耆域が治療し、浴室を設けることを提案した。世尊はこれを許された。比丘たちは裸で浴した。尼犍のごとくして風法あることなし、という非難が生じた。世尊は「浴衣を着せよ」と制せられた。

『五分律』「受戒法」 (大正 22 p.114 上) : 仏は王舎城におられた。そのとき尼犍という裸行外道 ⁽³⁾ がいて、マガダの人々から尊崇を受けていた。舍利弗はやっつけてやろうと尼犍のところに行き、打ち負かした。尼犍は仏道を学ぼうとして、舍利弗は短小であるが、その弟子の跋難陀は堂々としているので、舍利弗より勝るであろうと弟子となった。しかし彼は愚癡なるものであつて、尼犍の質問に答えられなかったので、愚癡なるものはたとひ十歳を越えていても授具足戒してはならないという規則が制定された。依止も畜沙弥も同じ。

『五分律』「受戒法」 (大正 22 p.118 上) : 跋難陀の弟子で昔外道であつた尼犍比丘 ⁽⁴⁾ は還俗してまた出家を希望した。出家させるべからず。滅擯せよ。

(1) ニガンタ派を意味しないかも知れない。

(2) 「国民の信施 (raṭṭhapiṇḍa)」については、「モノグラフ」第 13 号に掲載した【論文 15】「パーリ仏典に見られる janapada と raṭṭha」の [6] を参照されたい。p.183 以下

(3) 内容から見て、ニガンタ・ナータプッタをさすものではないであろう。

(4) 名前であつてニガンタ派を意味しないかも知れない。

[9] 単に六師外道について言及されるものもあり、これも紹介しておく。

DN.016 Mahāparinibbāna-s. (vol. II p.150) : 世尊の最後の直弟子となつたスバツダは、「サンガを持ち、弟子の師であり、大衆に尊敬されているプーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴーサーラ、アジタ・ケーサカンバリン、パクダ・カッチャーヤナ、サンジャヤ・ペーラッティプッタ、ニガンタ・ナータプッタらは、彼らは自分の智をもって知つたのか」と質問した。

『長阿含』002「遊行経」 (大正 01 p.025 上) : 須跋は「別衆をもち、自ら師と称している不蘭迦葉、末伽梨憍舎利、阿浮陀翅舎金披羅、波浮迦旃、薩若毘耶弗羅梨弗、尼犍子にはそれぞれ異法があり、よく尽くを知るのか」と質問した。

白法祖訳『仏般泥洹經』(大正01 p.171下) : 須拔は「私に8人の同志がある。故亀氏、無先氏、志行氏、白鷺子氏、延寿氏、計金樊氏、多積願氏、**尼犍子**である。彼らの智は螢燭之明なし」といった。

失訳『般泥洹經』(大正01 p.187中) : 須跋は「今の世に学者があつて、自ら師と称している。古亀氏、無失氏、志行氏、白鷺子氏、延寿氏、計金樊氏、多積願氏、**尼犍子**である。この八子は述べるところがあるが、これを自知するのか」と質問した。

法顯訳『大般涅槃經』(大正01 p.203中) : 須跋陀羅は「今の世に六師がある。**富蘭那迦葉、末伽利拘睺梨子、刪闍夜毘羅胝子、阿耆多 舍欽婆羅、迦羅鳩駄迦旃延、尼犍陀若提子**等です。彼らは各々一切智であると自説し、余の学者を邪見としています。どのように虚実を知ればよろしいでしょうか」と質問した。

Mahāparinirvāṇasūtra (p.372、「遊行經」下 p.637) : スバドラは「世間には異教徒がいます。プーラナ・カーシャパ (Pūraṇa Kāśyapa)、マスカリン・ゴーシャーリープトラ (Maskarin Gośālīputra)、サンジャイン・ヴァイルーティープトラ (Saṃjain Vairūṭīputra)、アジタ・ケーシャカンバラ (Ajita Keśakambala)、カクダ・カーティヤーヤナ (Kakuda Kātyāyana)、ニルグラント・ジュニヤーティプトラ (Nirgrantha Jñātiputra) です。彼らはそれぞれ自分の主張をしています」と語った。

『別訳雜阿含』110 (大正02 p.413上) : 世尊は拘尸那竭の末羅族の生地娑羅林に住された。そのとき世尊は涅槃の時を迎えようとされて、**阿難**に双樹の間に床を敷かせた。このとき拘尸那竭国に**須跋**という120歳の梵志がいて、「今夜、世尊が涅槃に入る」と聞いて、世尊のもとにやって来た。このとき阿難が須跋を制止すると、世尊は「彼を遮るな」と告げ、彼の六師外道 (**富蘭那迦葉、末伽梨俱睺梨子、阿闍耶毘羅胝子、阿闍多翅舍欽婆羅、迦尼陀迦旃那、尼乾陀闍提子**) に対する疑問に、「三十一にして出家し、爾來五十を過ぎ」云々と偈で答え、八正道の教えを説かれた。彼は世尊の教えを聞いて法眼淨を得、善來比丘にて出家し、阿羅漢を得た後、世尊より先に涅槃に入った。ときに世尊が涅槃に入られると、一人の比丘が偈を誦し、次いで帝釈天、大梵天、阿那律が偈を誦した。7日を経て、阿難は荼毘に付された如来を右繞して偈を誦した。

『増一阿含』042-003 (大正02 p.752中) : 須拔が世尊の最後の弟子(比丘)となり、世尊に**不蘭迦葉、阿夷耑、瞿耶楼、胝休迦旃、先毘盧持、尼犍子**などの六師外道は一切知者であるのかと尋ね、先に入滅した。

『根本有部律』「雜事」(大正24 p.396上) : このとき拘尸那城には出家外道の**善賢**がいて、彼は年齢120歳であったが、拘尸那城の末羅族の人々が阿羅漢の如く、恭敬供養していた。彼は近くに曼陀枳爾という名の大華池があつて、いつもその岸辺の烏曇跋樹のところに来ていた。ところがその樹木が枯れているのを見て、彼は異変を感じて世尊のもとを訪れた。そのとき**阿難**は彼が世尊に会うことを拒んだが、世尊は彼の3度にわたる懇請に気づき、会うことを許可された。彼は「諸外道、すなわち**瞿刺拏迦提波子、末塞羯利瞿梨子、珊逝移毘刺知子、阿市多難舍甘跋羅子、脚具陀迦多**

演那子、昵掲爛陀慎若低子が各々の説を主張しているが、どの説が道理に適っているのか」と質問した。世尊は「我、年二十九にして出家して善法を求め、また五十余年、専ら戒定慧を行じ、一心に散乱することなく、唯だ正理を求めた。斯の真法を除いて外に、別に沙門あることなし」と偈を誦されたのち、八正道を説かれた。彼は世尊の教えを聞いて法眼淨を得、出家具足戒を受けて阿羅漢となった。そして世尊に「先に入涅槃したい」と告げ、遺身五種加持をなして入滅した。これを知った世尊は比丘らに、自らの往昔救厄本生譚ならびに善賢最後弟子前生因縁譚を説かれた。

MN.030 *Cūḷasāropama-s.* (心材喩小經 vol. I p.198) : 世尊は舍衛城の祇樹給孤獨園におられた。そのときピンガラコッチャ婆羅門 (Piṅgalakoccha brāhmaṇa) が世尊のもとにやって来て、「沙門婆羅門はサンガやガナを所有し、プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴーサーラ、アジタ・ケーサカンバリン、パクダ・カッチャーヤナ、サンジャヤ・ベーラッティプッタ、ニガンタ・ナータプッタのように多数の人々に尊崇されているが、彼らは悟っているのか」と質問した。世尊は「そのことは暫く措くとして、心材を求める者は樹木の部位を熟知して切り出すからこそ心材が得られる。そのように信を以て出家修行者となり、利養や恭敬や名声などに一喜一憂せず、四禪、四無色定、想受滅を成就してこそ、その目的が達成される」と説かれた。彼はこの教えを聞き、三宝に帰依して優婆塞となった。

MN.077 *Mahāsakuludāyi-s.* (善生優陀夷大經 vol. II p.001) : 世尊は王舎城の竹林園に住された。そのとき多くの遊行者がモーラニヴァーバ遊行者園に住していた。そのとき世尊は迦蘭陀竹園からこのモーラニヴァーバ遊行者園に赴かれた。そのとき遊行者サクルダーイン (Sakuludāyi paribbājaka) が、仲間と共に大声を挙げて、王論、賊論、大臣論などを論議していた。ところが世尊の姿を見ると、皆を沈黙させた。そして世尊を招き入れた彼は、「プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴーサーラ、アジタ・ケーサカンバリン、パクダ・カッチャーヤナ、サンジャヤ・ベーラッティプッタ、ニガンタ・ナータプッタが多くの人々に尊ばれても、その弟子たちには離反されているのに対し、世尊は弟子たちに尊ばれているのは、少食、衣と食と住の少欲知足、遠離の五法にある」と言った。これを聞いた世尊は「そうではなくて、最上戒蘊の成就、自証自知、最上慧蘊の成就、四諦の教え、四念処などの教えを説いていることが、その理由である」と説かれた。彼はその教えを聞いて優婆塞となった。

『中阿含』207「箭毛經」(大正 01 p.781 中) : 世尊は王舎城に出かけて迦蘭陀竹園に居て、1,250 名の比丘と共に夏安居を受けられた。そのとき世尊は王舎城で乞食された後、孔雀林異学園に赴かれた。このとき孔雀林異学園には箭毛が 500 人の弟子と共にいて、彼が大声で種々の論を説いていたが、世尊の姿を見ると弟子たちを沈黙させた。そして世尊に「仏弟子が離れない理由は、衣食住の少欲知足、少食、燕坐(瞑想すること)の五法を説くからであろう」と語った。これに対して世尊は「そうではない。無上戒、無上智慧、無上知見、厭愛箭(四諦)、宿命智通作証明達や漏尽智通作証明達の五法を説くからである」と説かれた。彼はその教えを聞いて優婆塞となる。異学箭毛は、マガダ国人は王舎城に不蘭迦葉、摩訶迦利瞿舍利子、娑若鞞羅遲子、

尼犍親子、迦梅、阿夷哆難舍劍婆利など六師外道などの大福田がいて幸せだという。

『中阿含』208「箭毛経」(大正01 p.783下)：世尊は王舎城で乞食された後、孔雀林異学園に赴かれた。箭毛は500人の弟子と共に大声で種々の論を説いていたが、世尊の姿を見ると弟子を沈黙させた。世尊は彼が後世一向楽を説くのに対し、現世一向楽世証を主張され、四禅を以て最上・最妙・最勝の作証であると説かれた。箭毛は不蘭迦葉、摩訶迦利瞿舍利子、娑若鞞羅遲子、尼犍親子、迦梅、阿夷哆難舍劍婆利など六師外道は自らは一切智があるというが、行って質問してみると知らないこともあるといった。

SN.044-009 (vol. IV p.398)：(仏在処なし) そのとき婆蹉姓の普行沙門 (Vacchagotta paribbājaka) は昔 (purimāni) プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴーサーラ、ニガンタ・ナータプッタ、サンジャヤ・ベーラッティプッタ、パクダ・カッチャーヤナ、アジタ・ケーサカンバラから死後のことについて教えを受けたことを世尊に語る。

『雑阿含』105 (大正02 p.031下)：世尊は王舎城の迦蘭陀竹林におられた。そのとき仙尼という外道の出家者が富蘭那迦葉、末伽梨瞿舍利子、先闍那毘羅胝子、阿耆多翅舍欽婆羅、迦羅拘陀迦梅延、尼犍陀若提子など六師外道の教えを聞いても満足できず、世尊のもとを訪れた。世尊は彼に五受陰などの教えを説かれた。この教えを聞いた彼は、出家して法眼淨を得、後に阿羅漢となった。

『雑阿含』1177 (大正02 p.316下)：世尊は舎衛城の祇樹給孤独園におられた。そのとき世尊は比丘らに、「譬えば灰河の南岸は極めて熱く、暗闇であり、多数の罪人が河の中に漂っている。その中に一人の聰明なる者が流れに逆らい、莊嚴な四層の階堂に至って人々を招く。そのように仏は生死の流れを渡り、衆生を救われるのである」と説かれ、また富蘭那迦葉、末伽梨瞿舍利子、散闍耶毘羅胝子、阿耆多翅舍欽婆羅、迦羅拘陀迦梅延、尼犍連陀闍提多羅などの六師外道を名指して非難された。

AN.009-004-038 (vol. IV p.428)：(仏在処なし) 二人の順世派の婆羅門が世尊を訪れ、プーラナ・カッサパ、ニガンタ・ナータプッタ (他の4人は記されていない) は一切智者と言っているけれども真実かと質問した。

[10] ニガンタ・ナータプッタないしはニガンタ派の資料が多くなって、「ニガンタ資料集」のようなものになってしまった。本節の主題に係わる部分は[2] [3]のみである。この部分をまとめると次のようになる。

ニガンタ・ナータプッタは釈尊の晩年に釈尊よりも先に亡くなった。その時にはまだ舍利弗も存命であったから、ナータプッタは舍利弗よりも先に死んだということになる。われわれは舍利弗・目連の入滅は釈尊の77歳＝成道43年のことではないかと推測しているので、その死はそれ以前のことになる。

また一方「沙門果経」などの伝えるところによれば、ナータプッタは阿闍世太子が父のビンビサーラ王を殺して阿闍世王になって以降も生存していた。先に書いたように、「沙門果経」が説かれたのは、阿闍世が父を殺してマガダ王となって2年後、すなわち釈尊74歳＝成道40年の雨安居後のことと推測するなら、ナータプッタの死はその後ということになる。

すなわち 釈尊 74 歳＝成道 40 年から 釈尊 77 歳＝成道 43 年の 4 年の間のことであったことになる。

なおナータプッタが死んだ年の雨安居を釈尊は釈迦国で過ごされたということも考慮に入れなければならない。上記の 4 年間の釈尊の雨安居地を考えると、まず「沙門果経」の説かれたのは、雨期の明けるコームディーの日であり、仏在処は王舎城であるから、釈尊 74 歳の年の雨安居は王舎城で過ごされたことは間違いのないと思われる。また釈尊 76 歳の雨安居はバガ国のスンスマーラギラで過ごされたであろうことは、【論文 19】「コーサンビーの仏教」に書いたところである (p.256 では釈尊 77 歳となっているが、これは入胎からの年齢である)。また 77 歳には舍利弗・目連は生れ故郷で亡くなっているから、その年ではないとすると、可能性としては釈尊 75 歳＝成道 41 年しか残されていないことになる。したがって結論は次のようになる。

釈尊は 75 歳＝成道 41 年の雨安居を釈迦国で阿難らとともに過ごされた。一方この年の雨期をニガンタ・ナータプッタはマガダ国のナーランダー近くのパーヴァーで過ごしたが、この雨期中に死亡した。そのとき同じくパーヴァーで雨安居を過ごしていた、舍利弗の侍者であるチュンダ沙弥と呼ばれる長老がこれを知り、雨安居が明けると早々に釈迦国にまで注進に来て、釈尊はこのことを知られた。

MN.067 *Cātuma-s.* (1) と『増一阿含』045-002 (2)、『舍利弗摩訶目連遊四衢経』(3) は釈迦国のチャートウマーのアーマラキー樹園 (*Āmalakivana*) を仏在処とする経典であるが、ここでは舍利弗と目連の率いる 500 人の比丘たちが釈尊のもとにやって来て、新来比丘が旧住比丘と大きな声で挨拶を交したので、釈尊は阿難に命じて彼らを呼び出し、彼らに「この地を去れ」と叱責された、とされている。おそらくこれも同じ年のことであって、したがって舍利弗はおそらくチュンダ沙弥とともにパーヴァーで雨安居を過ごしたのであるが、この事件を知らせるためにチュンダを先に使者として派遣したのであろう。そしてその後に舍利弗・目連も遅れて到着したのである。そしてそれから共に南下される途中でマッラ国のパーヴァーにおいて釈尊の命を受けて舍利弗が DN.033 *Saṅgīti-s.* = 『長阿含』009「衆集経」を説き、釈尊はこれを印可された。

(1) vol. I p.456

(2) 大正 02 p.770 下

(3) 大正 02 p.860 上